住吉宮町遺跡

第11次調査

1990

神戸市教育委員会

住吉宮町遺跡　正誤表

P 1	図 1　調査地点位置図
	第 5 次 --→第 6 次
	第 6 次 --→第 5 次

住吉宮町遺跡

第11次調査

1990

神戸市教育委員会

序

神戸市の瀬戸内海に面する狭い平野部は、早くから市街化が進み、埋蔵文化財の存在についてはほとんど未知の状態でした。ところが、近年の再開発事業に伴い、これまで空白地帯であった市街地においても遺跡が相次いで発見されるようになってきました。

住吉宮町遺跡もそのひとつで、不幸にも工事中の不時発見でしたが、今回を含めて11回にわたる調査が行われ、数々の貴重な資料が得られています。今回の調査では、当遺跡が弥生時代中期初頭にまで遡ることが明らかとなったほか、平安時代の掘立柱建物群やそれに伴う地鎮遺構など様々な遺構・遺物が発見されました。

今回の発掘調査で明らかになりましたその成果を、ここに報告書としてまとめることができました。広く市民の皆様にご活用いただければ、幸いに存じます。

発掘調査および本書の刊行にあたり多くの方々のご協力を得ました。最後になりましたが、厚くお礼申し上げます。

平成2年3月31日

神戸市教育長

福　尾　重　信

例　　言

1．本書は、住吉宮町遺跡第11次発掘調査の報告書である。
兵庫県教育委員会の調査による「坊ヶ塚遺跡」も当遺跡と同遺跡であり、調査次数に含めている。

2．当遺跡は、神戸市東灘区住吉宮町６丁目に所在する。

3．発掘調査は土地売買に伴うもので、神戸市教育委員会が、株式会社ユーハイムから委託を受けて、1988年５月23日から同年８月12日までの間に実施したものである。発掘調査面積は1300㎡である。

4．発掘調査組織

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会）

小林　行雄	京都大学名誉教授
宮本長二郎	奈良国立文化財研究所
檀上　重光	神戸市立博物館副館長

教育委員会事務局

教育長	緒方　学
社会教育部長	岡村二郎
文化財課長	西川知佑
埋蔵文化財係長	奥田哲通
文化財課主査	中村善則
事務担当学芸員	渡辺伸行、西岡巧次
発掘調査担当学芸員	丸山潔、須藤宏、松林宏典
保存科学担当学芸員	千種浩

5．地震跡（噴砂）の調査については、通産省工業技術院　寒川旭氏の指導を受けた。

6．遺構実測は丸山、須藤、松林、古屋浩、遺物実測は谷川京子、原稿執筆は丸山、松林、編集は丸山が担当した。また、地震跡の土層転写は千種が担当した。

7．調査参加者

補助員	古屋浩
整理員	大前厚美、奥さおり、北野康子、谷川京子、遠山育子、畑谷敦子、前中早苗

目　　次

序
例　　言

第１章　はじめに……1

第２章　周辺の遺跡……3

第３章　遺　　構……9
　１．基本層序……9
　２．検出遺構……9
　　室町時代……9
　　平安時代後期……11
　　平安時代前期末……14
　　古墳時代後期……18
　　弥生時代中期～古墳時代前期……21

第４章　遺　　物……29
　　平安時代後期……29
　　平安時代前期末……32
　　古墳時代後期……33
　　弥生時代中期～古墳時代前期……35
　　石　　器……46
　　管　　玉……46

第５章　まとめ……47

挿図目次

図１　調査地点位置図……1
図２　周辺の主要遺跡分布図……5
図３　基本土層柱状図……9
図４　第１遺構面平面図……10
図５　第２遺構面平面図……11

図６　ＳＢ０１―１平・断面図……12
図７　ＳＢ０１―２平・断面図……13
図８　第３遺構面平面図……14
図９　ＳＢ０２平・断面図……15
図10　ＳＢ０３平・断面図……16
図11　ＳＢ０４平・断面図……16
図12　ＳＸ０１平・立面図……17
図13　ＳＸ０４平・立面図……17
図14　第４遺構面平面図……18
図15　ＳＢ０５―１・２平・断面図……19
図16　ＳＢ０６―１・２平・断面図……20
図17　第５遺構面平面図……21
図18　ＳＢ０７平・断面図……22
図19　ＳＢ０８平・断面図……23
図20　ＳＢ０９平・断面図……24
図21　ＳＢ１０平・断面図……25
図22　ＳＢ１１平・断面図……26
図23　ＳＢ１２平・断面図……27
図24　砂脈と噴砂の分布図……28
図25　ＳＢ０１出土土器（１～12）……30
図26　ＳＢ０１出土土器（13）……31
図27　ＳＸ０１出土土器（１～９）……32
図28　ＳＸ０４出土土器（１～４）……33
図29　ＳＢ０５・０６出土土器（１～４）……33
図30　包含層出土土器（１～22）……34
図31　ＳＢ０７出土土器（１～９）……35
図32　ＳＢ０８出土土器（１・２）……36
図33　ＳＢ０９出土土器（１～４）……36
図34　ＳＢ１０出土土器（１～９）……38
図35　ＳＢ１１出土土器（１～10）……40
図36　ＳＢ１１出土土器拓影……40
図37　ＳＢ１２出土土器（１～９）……42
図38　包含層出土土器（１～23）……44
図39　包含層出土土器（24～29）……45
図40　石器及び玉類……46
図41　ＳＢ１１出土壷形土器復元図……50

写　真　図　版

図版１　１．調査地付近航空写真
　　２．調査地付近航空写真
図版２　１．花崗岩採石跡
　　２．花崗岩に残された矢穴
図版３　１．ＳＢ０１－１
　　２．ＳＢ０１－１柱穴補修跡
図版４　１．ＳＸ０１土器出土状況
　　２．ＳＸ０４土器出土状況
図版５　１．ＳＢ０５
　　２．ＳＢ０６
図版６　１．ＳＢ０７
　　２．ＳＢ０８
図版７　１．ＳＢ０９
　　２．ＳＢ１０
図版８　１．ＳＢ１０土器出土状況
　　２．ＳＢ１１
図版９　１．地震跡検出状況
　　２．転写面前処理（樹脂噴霧）
　　３．転写用樹脂第１次塗布
　　４．補強材貼付
　　５．転写用樹脂第２次塗布
　　６．転写完了
図版10　ＳＢ０１出土土器
　　１．須恵器椀
　　２．黒色土器椀
　　３．灰釉椀
　　４．土師器小皿
　　５．須恵器大甕

第1章　はじめに

1．はじめに

住吉宮町遺跡は、六甲山系に源を発する住吉川と石屋川によって形成された扇状地に立地する。標高は20m前後で、現在の海岸線からの距離は約1.1kmを測る。

1985年6月14日、住吉宮町7丁目のマンション建設現場の工事中に、地表下約1.5mのところで中世の土坑および土器が発見された。さらに、同地において試掘調査を行った結果、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭・古墳時代後期末・中世の遺物包含層が確認され、住吉宮町遺跡と命名された。

その後、調査は今回までに10次にわたって行われ、弥生時代終末期から鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなってきた。

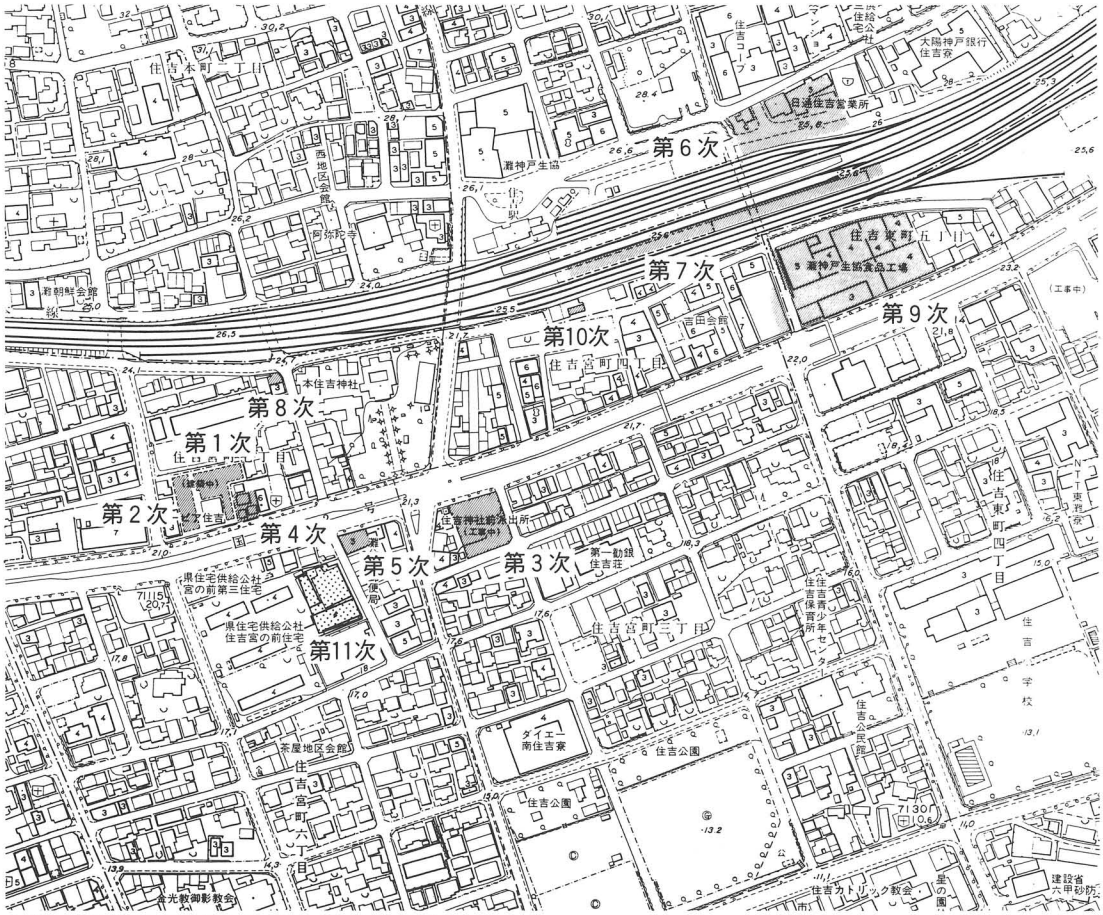


図1　調査地点位置図（S＝1：5,000）

住吉宮町遺跡調査一覧

次数	調査期間	調査主体	調　査　内　容
1	85.6.14 ～85.9.5	市教委	古墳時代後期初頭の古墳３基、古墳時代後期末のピット・土坑など、鎌倉時代の土坑など （西岡誠司・山本雅和「住吉宮町遺跡第１次」『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1988）
2	85.8.19 ～85.10.9	市教委	古墳時代前期初頭の土坑など、古墳時代後期初頭の古墳８基、古墳時代後期の河道・ピットなど （山本雅和「住吉宮町遺跡第２次」『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1988）
3	85.12.13 ～86.1.10	市教委	古墳時代・鎌倉時代・近世の溝・土坑・ピットなど （口野博史「住吉宮町遺跡第３次」『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1988）
4	86.7.25 ～86.8.25	市教委	古墳時代前期初頭の土坑など、古墳時代後期初頭の箱式石棺３基など、古墳時代後期末～奈良時代の溝など （山本雅和「住吉宮町遺跡第４次」『昭和61年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1989）
5	87.4.8 ～87.5.29	県教委	弥生時代末以前の水田３面以上、弥生時代後期末の方形周溝墓３基、古墳時代前期の竪穴住居・木棺墓・土坑墓、古墳時代後期の方墳９基・河原石積石室２基、古墳時代後期の水田、平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物２棟など
6	87.7.15 ～87.7.23	県教委	古墳時代の土坑、中～近世の土坑など
7	87.7.24 ～87.10.28 87.11.7 ～88.2.26	県教委	弥生時代中期～古墳時代後期の水田、弥生時代末の方形周溝墓１基、古墳時代後期の古墳２基・土器棺１基 （渡辺昇『住吉宮町遺跡群Ⅰ（坊ヶ塚遺跡）－神戸市新交通３号線建設に伴う埋蔵文化財調査報告－』兵庫県文化財調査報告63　1989）
8	87.12.8 ～87.12.15	市教委	鎌倉時代のピットなど
9	88.4.2 ～88.10.7	市教委	弥生時代後期末の周溝墓１基、古墳時代後期の竪穴住居10棟・古墳３基・帆立貝式前方後円墳１基（住吉東古墳　全長24m、造出部長６m、円筒埴輪・朝顔形埴輪・人物埴輪馬形埴輪、墳頂部石列、木棺直葬）、奈良時代の掘立柱建物９棟など （『住吉宮町遺跡現地説明会資料』神戸市教育委員会 1988）
10	88.5.9 ～88.5.23	県教委	古墳時代後期の溝など

第2章　周辺の遺跡

住吉宮町遺跡の存在する東灘区周辺には、古くから知られた遺跡のほかに、近年の再開発などにより狭小な平野部分でも新たに多くの遺跡が発見されている。ここでは、住吉宮町遺跡を中心として六甲山南麓の東灘区・灘区および芦屋市の一部に所在する遺跡について概観していきたい。

先土器時代

神戸市域において、これまでに旧石器時代の遺構は知られていない。現在知られている資料は、他の時代の遺跡の調査の際に発見されたものや偶然に採取されたものだけで、滝ノ奥遺跡[1]で有茎尖頭器が、桜ヶ丘遺跡B地点でナイフ型石器がそれぞれ出土している。

縄紋時代

早期の遺跡としては、芦屋市の山芦屋遺跡[2]が知られていたが、近年の調査により神戸市域においても早期の遺構・遺物が知られるようになった。西岡本遺跡では、高山寺式に属すると考えられる住居址2棟が検出されている[3]。このほか、郡家遺跡中町地区[4]の土坑からは高山寺式土器が出土しているほか、都賀遺跡でも高山寺式土器を含む包含層が確認されている[5]。篠原遺跡は、戦前に小林行雄氏によって縄紋時代晩期および弥生時代後期の遺跡として報ぜられていた[6]が、近年の調査により縄紋時代中期以降晩期にかけて続く遺跡であることが判明した[7]。中期末の住居址や晩期中葉の甕棺墓群などが検出されており、晩期中葉の土器群のなかに大洞式の土偶・注口土器などが含まれている。また、時期は不明だが井戸田では石匙2点が採取されている[8]。

弥生時代

六甲山南麓東部の平野部で現在知られる最古のムラは前期前半の北青木遺跡で、水田を営んでいたと推定され、土器類のほか木製農耕具・紡織具などが出土している[9]。処女塚古墳墳丘盛土中からは前期の土器が出土しており[10]、付近に集落の存在した可能性を示唆している。本山遺跡は、縄紋時代晩期に引続き弥生時代全般にわたって生活が営まれている[11]。

中期に入ると、平野部では前期に引続き北青木遺跡や本山遺跡では集落が営まれ、森北町遺跡[12]や住吉宮町遺跡でもこのころから集落が営まれはじめる。ところが、中期中葉以降急に可耕地から離れた高所に集落が営まれ始める。いわゆる高地性集落と呼ばれるもので、六甲山南麓の東半部で特にその分布が濃密である。主なものを東からあげると、芦屋市の城山[13]（付近の水田との比高差250m）、会下山[14]（同110m）、森奥（東山）[15]（同150m）、坂下山[16]（同60m）、金鳥山[17]（同210m）、保久良神社[18]（同150m）、荒神山[19]（同200m）、赤塚山（同120m）、桜ヶ丘B地点[20]（同60m）、伯母野山[21]（同160

m）がある。いずれも後期まで続けて営まれている。これらの集落に挟まれて森[22]・生駒[23]・渦ヶ森[24]・桜ヶ丘[25]の銅鐸や保久良神社・桜ヶ丘の銅戈の出土をみるのである。保久良神社境内には、磐座とみられる巨石群があり古くから神のよりしろであったと考えられている。

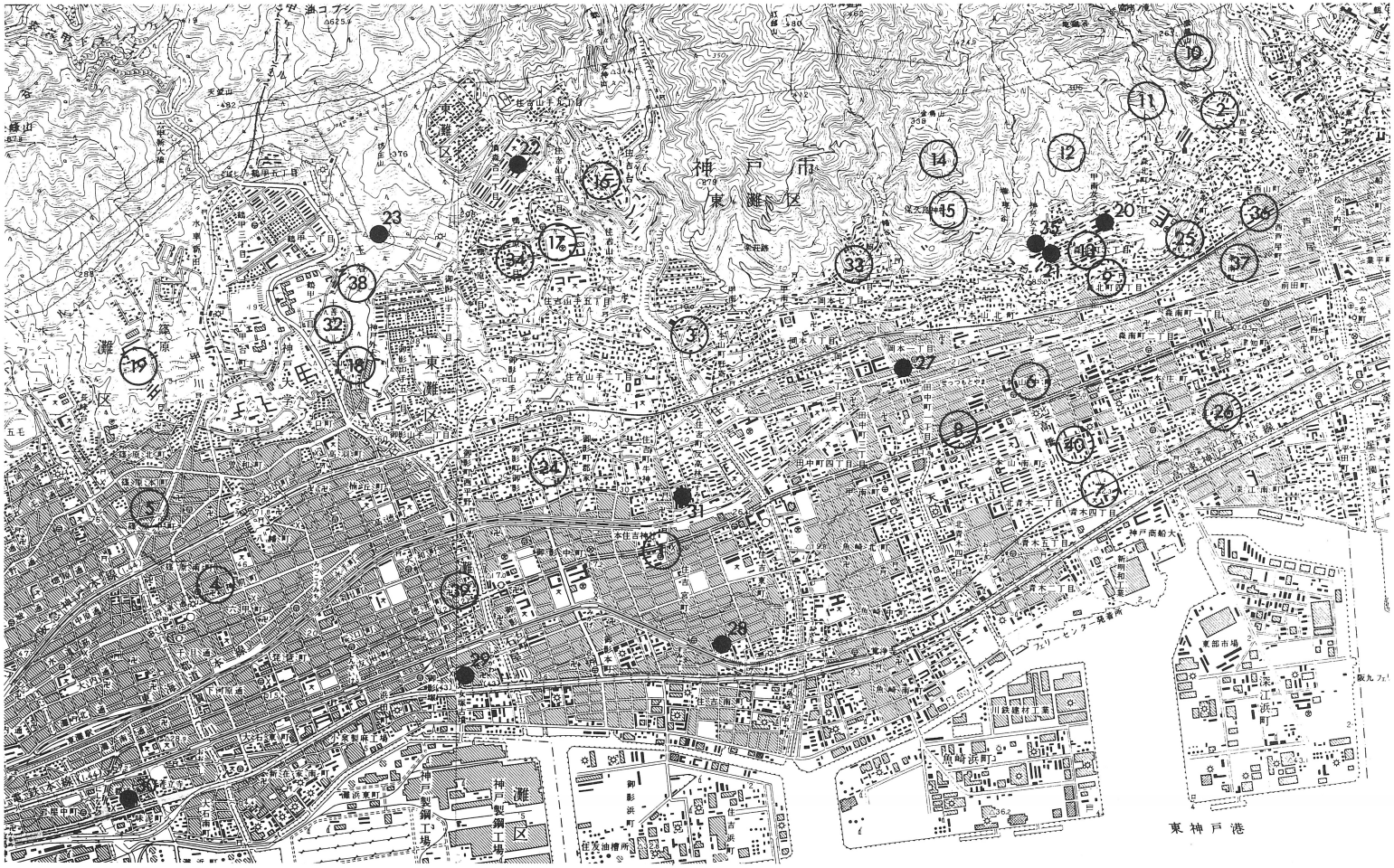
後期から始まる遺跡としては、郡家遺跡[26]や芦屋市三条岡山遺跡[27]などがある。郡家遺跡では竪穴住居のほか、近接して円形周溝墓や集石墓が存在する。深江北町遺跡では弥生時代末～古墳時代初めにかけての円形周溝墓群が検出されている[28]。同じ頃の遺物として、森北町遺跡では、前漢時代のものと考えられる重圏銘帯鏡が出土している[29]。

古墳時代

六甲山南麓の平野部では比較的多くの前期古墳が知られている。一般にこの頃の古墳が丘陵上や尾根上などに築造されることが多いのに比べ、六甲山南麓の平野部でも東半部では集落の立地する平野部に見られる。しかし、これらは戦前に調査されたものが多く、戦後は急速な開発の波に飲み込まれ消滅したものや家並の中にかろうじて残されるような状態で、不明な点が多い。周辺で最も古いものは岡本のヘボソ塚古墳で全長約64mの二段築成の前方後円墳で、主体部の竪穴式石室からは三角縁神獣鏡２面を含む銅鏡６面、石釧２個などが出土している[30]。謡曲『求女塚』などの悲恋伝説で知られる東求女塚[31]・処女塚[32]・西求女塚[33]の３古墳も前期古墳で、東求女塚古墳は全長80m以上の前方後円墳で、前方部からは三角縁神獣鏡４面を含む銅鏡６面などが発見され、後に後円部からも内行花文鏡など２面の銅鏡片が出土している。処女塚古墳は全長約70mの前方後方墳で、墳丘上からは竹管円形文を施した二重口縁の壺形土器などが出土している。西求女塚古墳は全長約110mの前方後円墳で、葺石を有しており後円部に竪穴式石室の残骸と考えられる板石を確認している。また、後円部墳頂付近からは獣帯鏡の破片や二重口縁の壺形土器や山陰系とみられる鼓形器台などが出土している。

中期については、大型古墳が存在したと伝えられるが現在では明確でない。後期に入ると、古墳の規模は縮小し、群集墳の形成が始まる。古くは全長約40mの前方後円墳である坊ヶ塚古墳や卍字型鏡や四獣鏡などを出土した十善寺古墳、岡本梅林古墳群[34]、鴨子ヶ原古墳群などが知られていたが、いずれも今日その姿を見ることはできない。現在は、神戸女子薬科大学構内に横穴式石室を主体部とする生駒古墳が残されているだけである[35]。ところが、近年の市街地の調査において、これまで知られていなかった古墳が相次いで発見されている。住吉宮町遺跡もそのひとつで、帆立貝式前方後円墳の住吉東古墳[36]をはじめ、10m内外の小方墳が10数基検出されている[37]。

図2　周辺の主要遺跡分布図



1．住吉宮町遺跡
2．山芦屋遺跡
3．西岡本遺跡
4．都賀遺跡
5．篠原遺跡
6．井戸田遺跡
7．北青木遺跡
8．本山遺跡
9．森北町遺跡
10．城山遺跡
11．会下山遺跡
12．森奥遺跡
13．坂下山遺跡
14．金鳥山遺跡
15．保久良神社遺跡
16．荒神山遺跡
17．赤塚山遺跡
18．桜ケ丘遺跡B地点
19．伯母野山遺跡
20．森銅鐸出土地
21．生駒銅鐸出土地
22．渦ケ森銅鐸出土地
23．桜ケ丘銅鐸出土地
24．郡家遺跡
25．三条岡山遺跡
26．深江北町遺跡
27．ヘボソ塚古墳
28．東求女塚古墳
29．処女塚古墳
30．西求女塚古墳
31．坊ケ塚古墳
32．十善寺古墳
33．岡本梅林古墳群
34．鴨子ケ原古墳群
35．生駒古墳
36．芦屋廃寺址
37．寺田遺跡
38．滝ノ奥遺跡
39．徳井町遺跡
40．小路大町遺跡

住吉東古墳は全長24m、造出部長6mを測り、墳丘には円筒埴輪・朝顔形埴輪・人物埴輪・馬形埴輪を巡らし、墳頂部には石列を巡らす。埋葬主体は木棺直葬である。なお、墳丘築造途中に喪屋や目隠し塀を建てたと考えられる建物址が検出されている。時期は5世紀末頃と考えられる。小方墳群は円筒埴輪を有する物もあり、埋葬主体は木棺直葬・箱式石棺・須恵器甕直葬などがある。時期は6世紀前半および後半である。また、西岡本遺跡では、5世紀末～7世紀初頭にかけて13基以上の古墳が築造されている(野寄古墳群)[38]。

この時代の集落としては、郡家遺跡・深江北町遺跡・森北町遺跡・住吉宮町遺跡などがある。郡家遺跡中町地区[39]では中期の水田跡が検出されている。郡家遺跡城の前地区では通有の竪穴住居や掘立柱建物に混じってL字形の煙道を有するカマドをもつ竪穴住居があり[40]、韓式系土器の出土もあわせて渡来系氏族との関連が考えられる。また、森北町遺跡においても韓式系土器の出土がみられる[41]。

奈良時代以降

郡家遺跡大蔵地区[42]では、一辺1m前後の掘り形をもつ掘立柱建物が検出され、残された地名などから「菟原郡衙」の所在地であると推定されている。このほか、住吉宮町遺跡や深江北町遺跡でも奈良時代の掘立柱建物群が検出されている。保久良神社遺跡では奈良時代の瓦が採取されており、のちの延喜式内社たる保久良神社の神宮寺の存在が十分に予想される[43]。また、鎌倉時代末～室町時代初頭とされる懸仏なども出土している。芦屋廃寺址では、奈良時代前期の法隆寺式瓦を出土しているが、現在のところ伽藍配置を示す明確な遺構は確認されていない[44]。深江北町遺跡では、奈良時代～平安時代初期の掘立柱建物を検出しており、銅製の銙帯や小型仿製鏡などを伴出している[45]。芦屋市寺田遺跡では、平安時代前期の掘立柱建物とそれに伴う柵列が検出されている[46]。滝ノ奥遺跡では、平安時代中頃の寺院址とみられる掘立柱建物2棟が存在し、その東方に礎石と思われる石が残存しており13世紀前半頃の建物と推定されている。12世紀中頃には経塚も築造されている[47]。徳井町遺跡では、平安時代末～室町時代にかけての掘立柱建物とそれに伴う木棺墓などが検出されている[48]。小路大町遺跡では、条里制地割に一致する中、近世の水田址を検出している[49]。

郡家遺跡岸本地区では、近世初頭の「石切り」に関連する遺構・遺物が検出されている[50]。

註

註１　森田　稔　「滝ノ奥遺跡」『昭和56年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1984

註２　森岡秀人　「山芦屋遺跡」『新修芦屋市史』資料編１　1976

註３　1989年六甲山麓遺跡調査会調査

註４　口野博史・水嶋　稔ほか　『郡家遺跡　御影中町地区第３次調査概報』　神戸市教育委員会　1990

註５　1989年妙見山麓遺跡調査会調査

註６　小林行雄　「摂津国神戸市篠原遺跡に就いて」『史前学雑誌』１－４・５　1929

註７　定森秀夫ほか　『神戸市灘区篠原Ａ遺跡』　財団法人　古代学協会　1984

註８　田岡香逸　「歴史概観」『本山村誌』　1953

註９　小川良太・山下史朗ほか　『北青木遺跡』兵庫県文化財調査報告書35　1986

註10　千種　浩　「史跡処女塚古墳」『昭和56年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1983

註11　南　博史ほか　『神戸市東灘区本山遺跡発掘調査報告書』　財団法人　古代学協会　1984

註12　西岡巧次　『森北町遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1986

註13　村川行弘　「芦屋城山遺跡調査概報」『芦屋市文化財調査報告』１　1959

註14　村川行弘・石野博信　『会下山遺跡』　芦屋市文化財調査報告３　1964

註15　宮本郁雄　「本山町東山遺跡」『昭和59年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1987

註16　村川行弘・森岡秀人　「弥生時代」『新修芦屋市史』資料編１　1976

註17　石野博信　「神戸市金鳥山遺跡－保久良神社銅戈出土地の裏山」『古代学研究』48　1967

註18　樋口清之　「摂津保久良神社遺跡の研究」『国学院大学験杉会紀要』４　1942

註19　阿久津久・浅岡俊夫・石野博信　『荒神山遺跡調査概報』神戸市文化財調査報告14　1970

註20　神戸市立考古館編　『地下にねむる神戸の歴史－発掘現場からの報告－』　1980

註21　若林　泰・斉藤英二　『伯母野山弥生遺跡』神戸市文化財調査報告６　1963

註22　村川行弘・三木文雄　「神戸市東灘区本山町森字坂下町出土銅鐸」『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書』兵庫県文化財調査報告書１　1969

註23　村川行弘　「神戸市東灘区本山町中野字生駒出土の銅鐸」『考古学雑誌』51-2　1965

註24　梅原末治　「住吉村新発見の銅鐸」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』11　1935

註25　武藤　誠・村川行弘ほか　『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書』兵庫県文化財調査報告書１　1969

註26　「神戸の遺跡」『新修　神戸市史』歴史編Ⅰ自然・考古　1989

註27　森岡秀人・古川久雄・坂井秀弥　『三条岡山遺跡』芦屋市文化財調査報告10　1979

註28　山下史朗ほか『神戸市東灘区深江北町遺跡』兵庫県文化財調査報告書54　1988

註29　黒田恭正　「森北町遺跡」『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1988

註30　梅原末治　「武庫郡本山村マンバイのヘボソ塚古墳」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』２　1925

註31　渡辺伸行　「東求女塚古墳」『昭和57年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1985

註32　神戸市教育委員会編　『史跡処女塚古墳』　1985

註33　渡辺伸行・千種　浩　「西求女塚古墳」『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1988

註34　吉井良秀　「摂津国武庫郡岡本村の小石棺に就いて」『考古学雑誌』３―11　1913

註35　神戸大学考古学研究会　『神戸女子薬科大学構内古墳測量調査概要』　1981

註36　1988年度神戸市教育委員会調査

註37　西岡誠司・山本雅和　「住吉宮町遺跡第１次」『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1988

　　山本雅和　「住吉宮町遺跡第２次」『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1988

註38　1989年六甲山麓遺跡調査会調査

註39　註４に同じ

註40　丸山　潔　「郡家遺跡城の前地区第23次調査」『昭和61年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1989

　　丸山　潔　「郡家遺跡城の前地区第24次調査」『昭和62年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1990

註41　黒田恭正　「森北町遺跡」『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1988

註42　註20に同じ

註43　註８に同じ

註44　村川行弘ほか　『芦屋廃寺址』芦屋市文化財調査報告７　1970

註45　註28に同じ

註46　南　博史ほか　『芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書』　財団法人　古代学協会　1985

註47　註１に同じ

註48　1989年妙見山麓遺跡調査会調査

註49　長谷川眞・高橋　学・岡田章一ほか　『小路大町遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書45　1987

註50　口野博史　「郡家遺跡（岸本地区）」『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1988

第3章　遺　　構

1．基本層序

調査地は工場跡地で、地区内は建物の基礎による撹乱が著しかったが、5面存在した遺構面のうち第2遺構面までで撹乱の大部分は留まっている。それ以下のものについてはほとんど影響を受けず、比較的良好な状態で遺構を検出することができた。

調査地の基本的な層序は以下の通りである。

(1)　盛土および撹乱土

(2)　灰色シルト混粗砂層

(3)　褐灰色粗砂層（上面が第1遺構面）

(4)　褐灰色粗砂混シルト層（上面が第2遺構面）

(5)　明褐灰色シルト混粗砂（上面が第3遺構面）

(6)　黒色砂質シルト層（上面が第4遺構面）

(7)　褐色シルト混粗砂層（上面が第5遺構面）

第1遺構面の標高はT.P.18.5m前後、第5遺構面の標高はT.P.17.0m前後である。全体に北から南に向かってゆるやかに下降している。

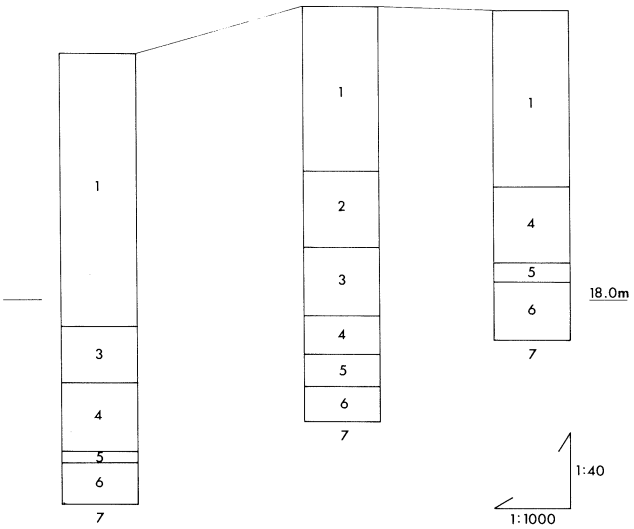


図3　基本土層柱状図（西壁）

2．検出遺構

室町時代
（第1遺構面）

現代の盛土下に近世の水田土壌が広がる。その水田土壌の下には、六甲山南麓の大部分の地域に見られる土石流が存在した。その堆積中には一辺

0.5～1.5m前後の花崗岩が点在する。その花崗岩を石材として搬出するために、石の周囲を掘り窪め矢鉄によって割り取った、いわゆる採石址が存在した。矢穴のある石塊が残され、また抜き取りのあとの窪みには石屑が堆積することから、採石したのちその場で加工調整が行われたと推察される。この採石は、土石流の表面が土壌化する前の堆積後間もなく行われている。

採石址の時期については、生活址ではないため時期判定の可能な遺物が少なく、その決定は困難であるが、わずかに出土した備前焼の擂鉢片から15～16世紀頃のものと考えられる。

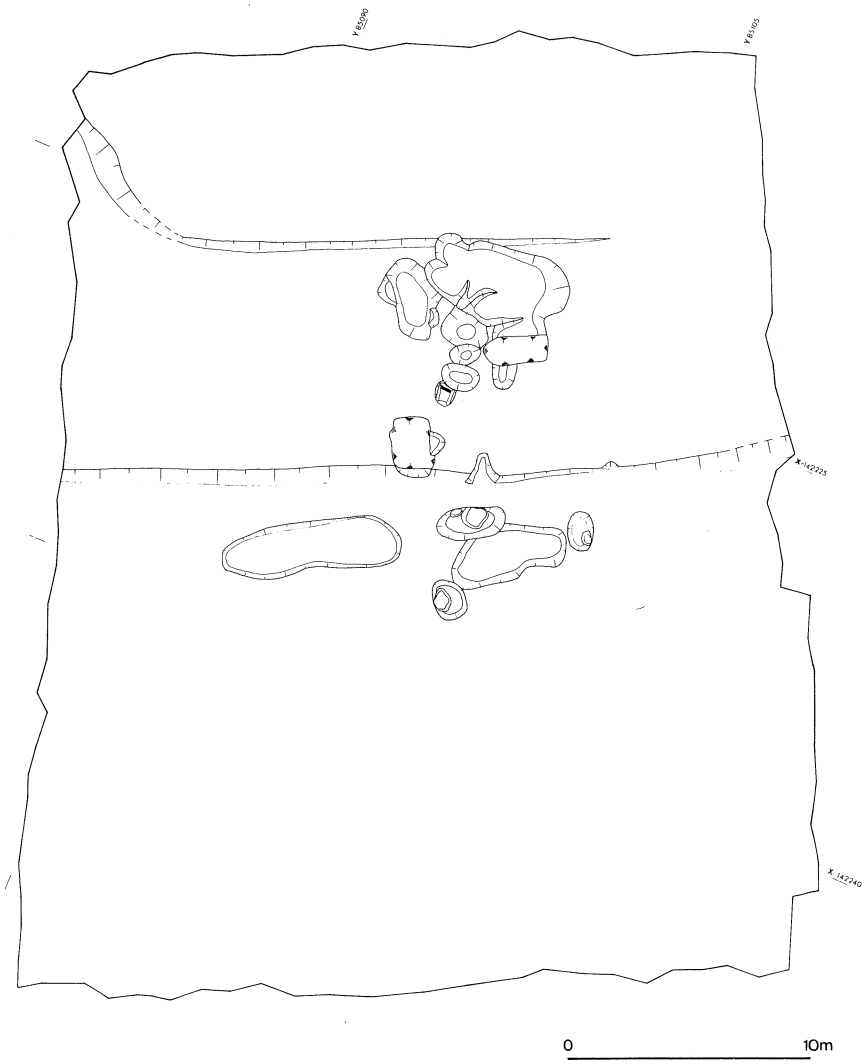


図4　第1遺構面平面図

平安時代後期　　第１遺構面の基盤となる土石流の堆積（約35cm）を取り除くと、粗砂混
（第２遺構面）　じりのシルト層を基盤とする第２遺構面が存在する。この面では掘立柱建
物２棟が検出されている。

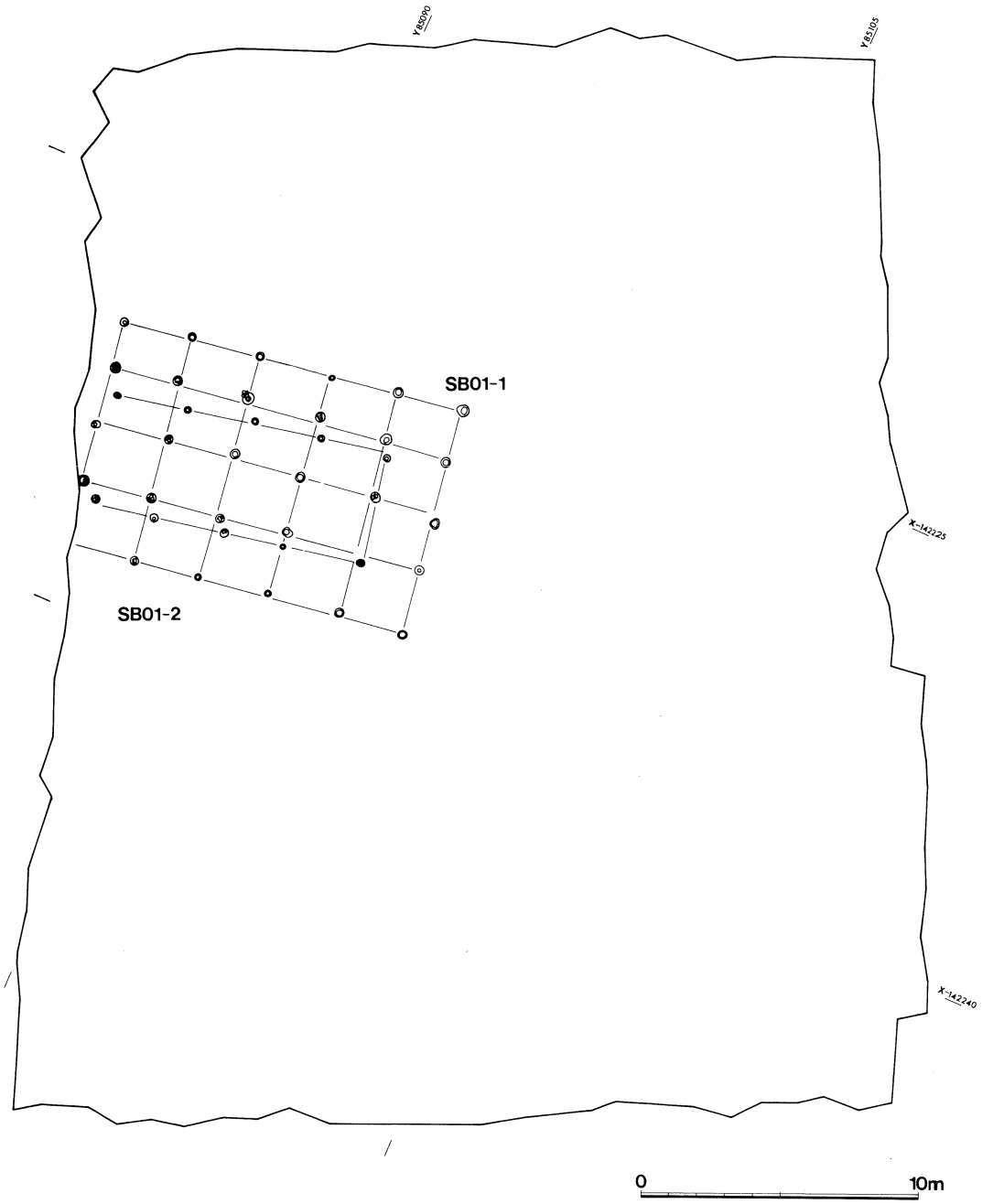


図５　第２遺構面平面図

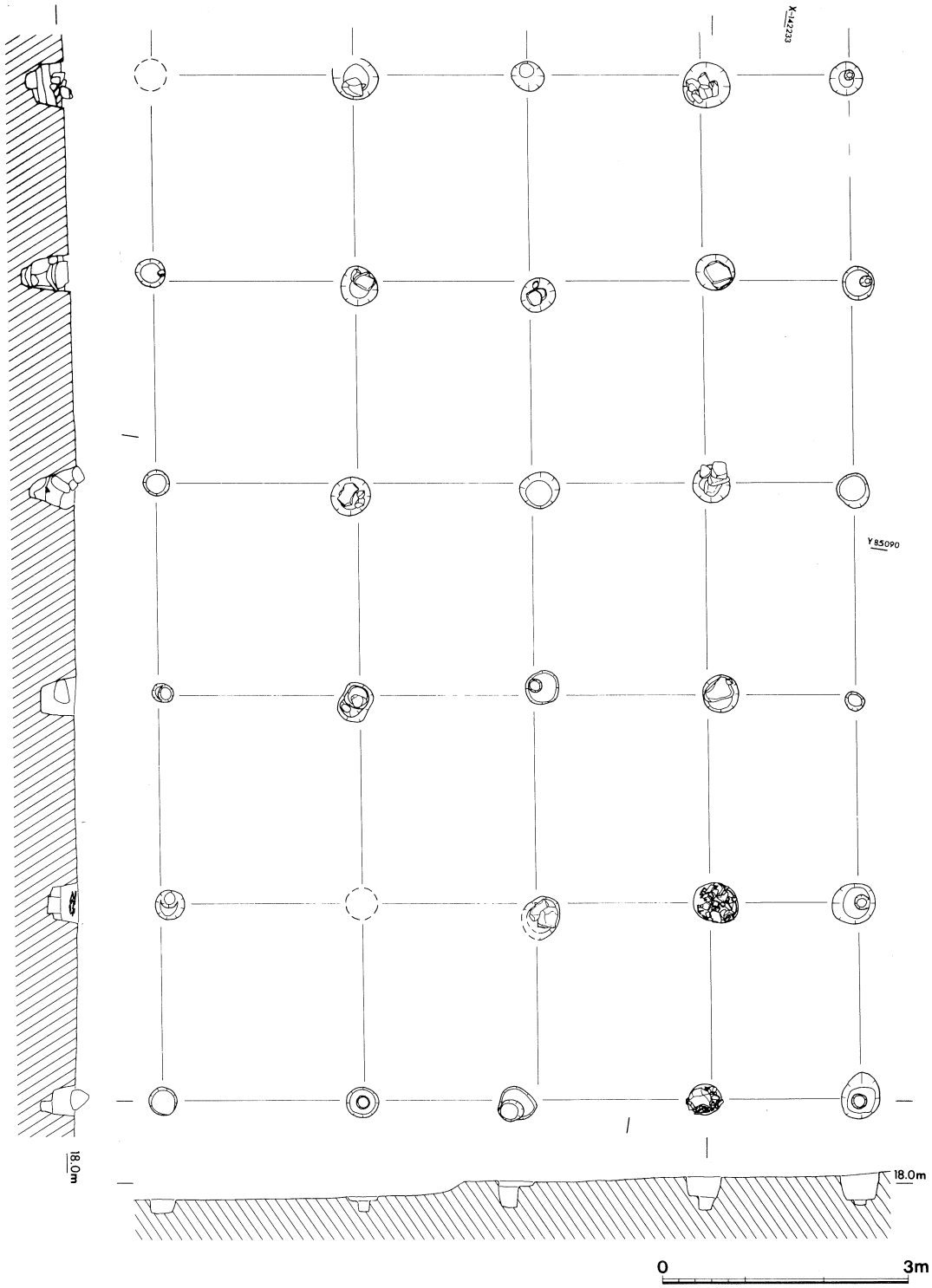


図6　ＳＢ０１－１　平・断面図

ＳＢ０１－１　梁行４間（8.5m）桁行５間以上（12.5m）の掘立柱建物である。主軸は真北から東へ82°振ったほぼ東西方向の建物である。柱穴の掘り形は径40～60cmの円形で、柱痕跡の径は25～30cm前後である。検出面からの深さは後世の削平を受けていない部分では60cm程度である。桁方向の北から２列目と４列目の柱列は補修をしたらしく、すべて柱根を抜き取り、河原石ないしは須恵器などで埋め戻し礎盤としている。また、中央の柱列でも２本の柱根が抜き取られ、石が据え置かれている。

この掘立柱建物の時期は、柱穴内から出土した土器で確認できるが、これは補修の際のものである。出土土器は須恵器椀・鉢・甕、灰釉山茶椀、黒色土器椀などで、それぞれの柱穴から出土した土器片は互いに接合するものもあり、補修が一時に行われたことを示している。これらの土器は11世紀中葉に属するものである。

ＳＢ０１－２

梁行１間（4.0m）桁行４間以上（10.0m）の掘立柱建物である。主軸は真北から東へ79°振ったほぼ東西方向の建物である。ＳＢ01-1とほぼ同方位の建物であるが規模は小さい。この建物の柱穴の掘り形は径30～40cmとＳＢ01-1に比して小型である。検出面からの深さは後世の削平を受けていない部分では30cm前後である。桁方向の南側の柱列では南東隅からひとつおきに礎盤にしたと考えられる河原石が置かれていた。

この掘立柱建物の時期は、柱穴内から出土した土器から10世紀後半と考えられる。

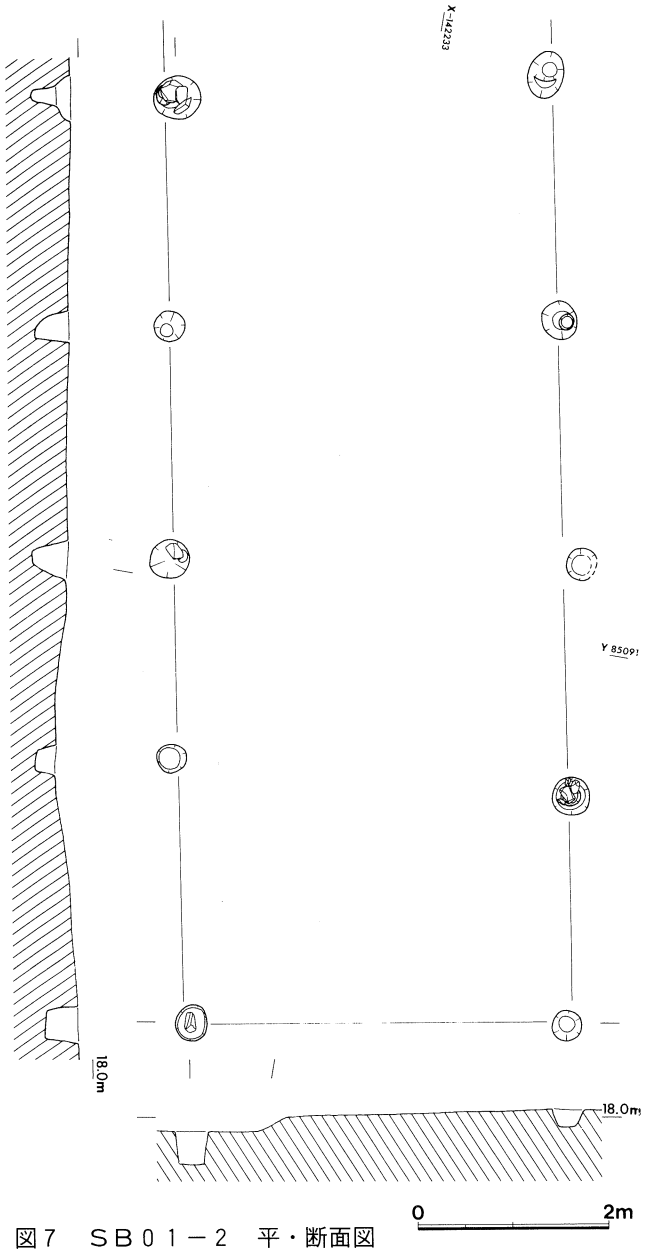


図７　ＳＢ０１－２　平・断面図

平安時代
前期末
（第３遺構面）

第２遺構面より20～30cm下で再び洪水砂の層位になる。その層位を基盤にするのが第３遺構面である。この時期の遺構は調査区の西方に広がるらしく、調査区の西端で３棟の掘立柱建物（ＳＢ02・ＳＢ03・ＳＢ04）とそれに伴うと考えられる地鎮遺構２ヶ所（ＳＸ01・ＳＸ04）を検出している。

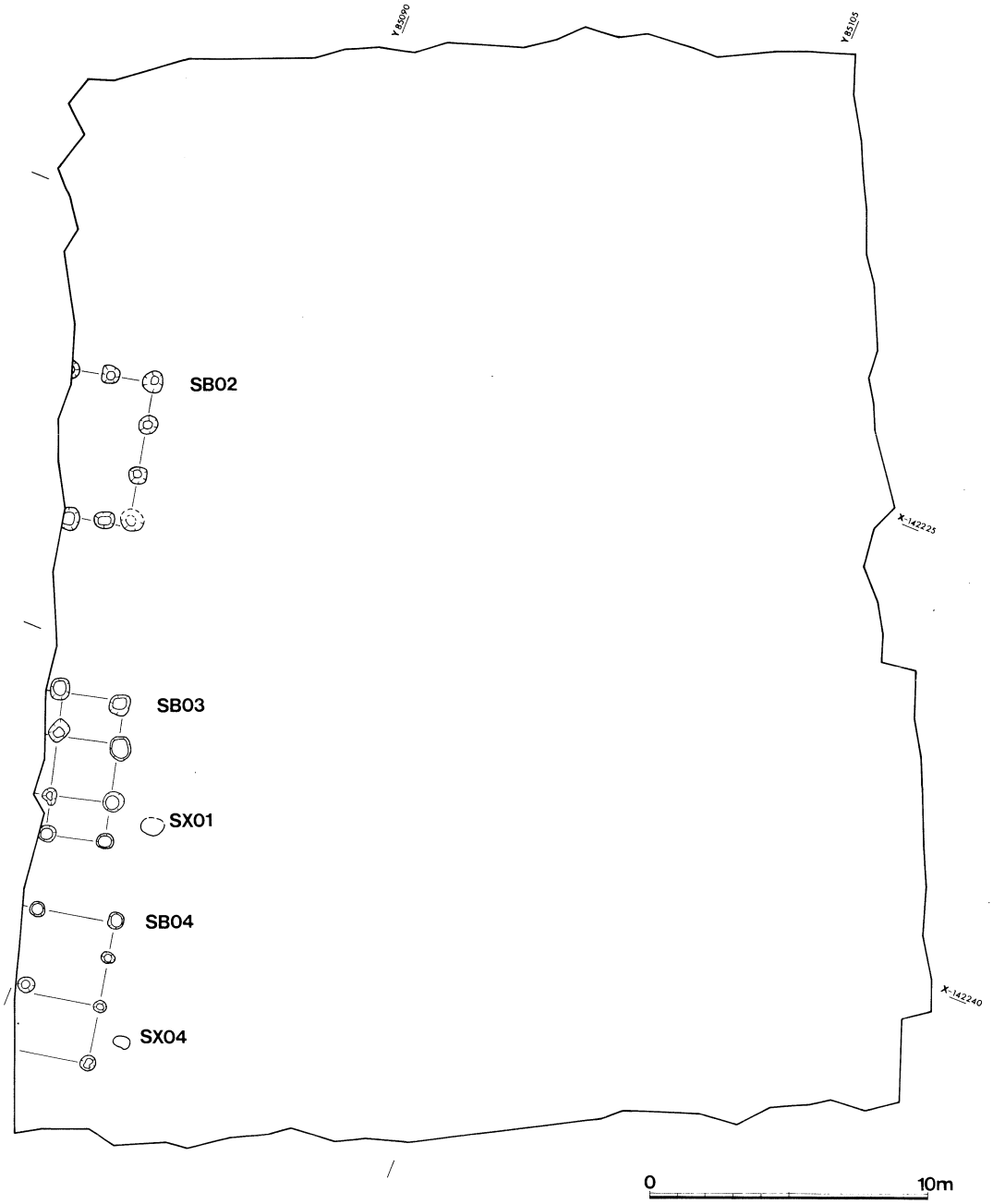


図８　第３遺構面平面図

ＳＢ０２　　南北３間（5.2m）で東西は１間分のみ検出しており、全体の規模は不明である。柱穴の掘り形は70～90cmの隅丸方形で、検出面からの深さは40cm程度である。柱痕跡は確認できたもので径30cm程度である。

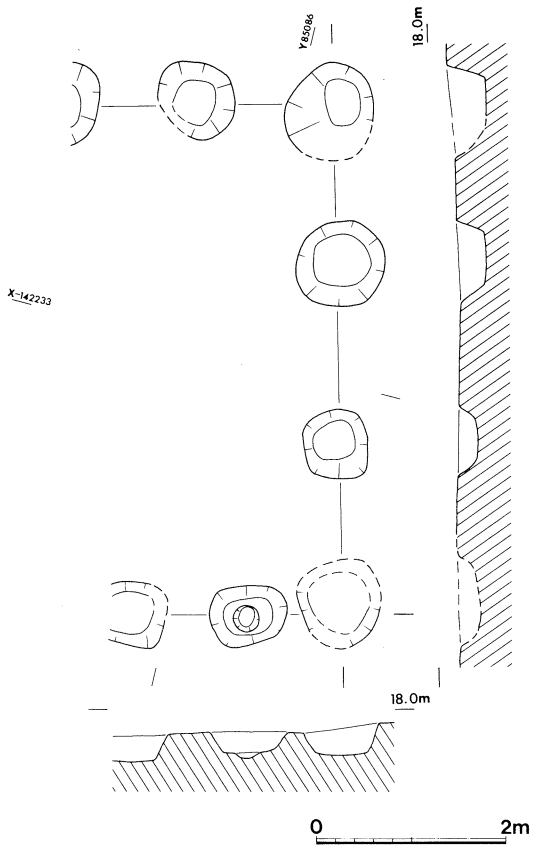


図９　ＳＢ０２　平・断面図

ＳＢ０３　　南北３間（5.0m）で東西は１間分のみ検出しており、全体の規模は不明である。柱穴の掘り形は60～80cmの隅丸方形で、検出面からの深さは30cm程度である。柱痕跡は確認できたもので径30cm程度である。

ＳＢ０４　　南北３間（5.5m）で東西は１間分のみ検出しており、全体の規模は不明である。柱穴の掘り形は50～80cmの隅丸方形で、検出面からの深さは40cm程度である。柱痕跡は確認できたもので径30cm程度である。

これらＳＢ02～04の掘立柱建物の方位は、それぞれ真北から西へ14°（ＳＢ02）、15°（ＳＢ03）、12°（ＳＢ04）となり、その配置とともにかなり規格性の高い建物群の一部と考えられる。

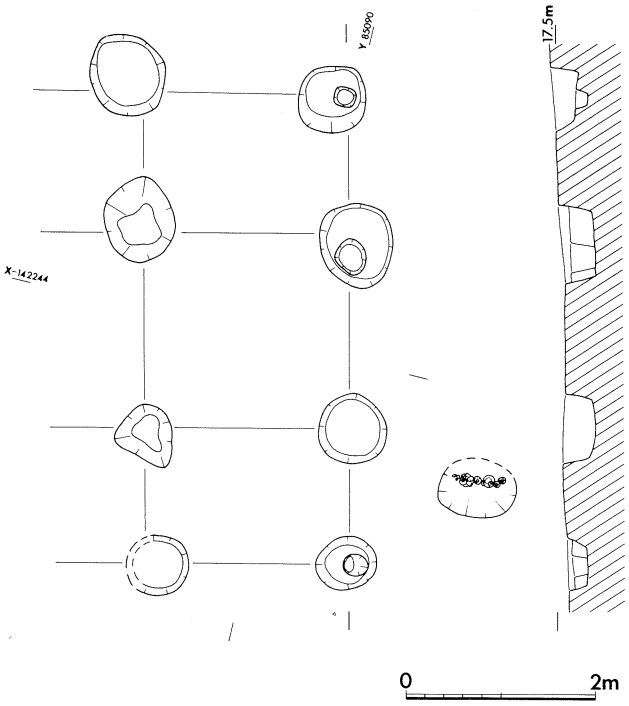


図10　ＳＢ０３　平・断面図

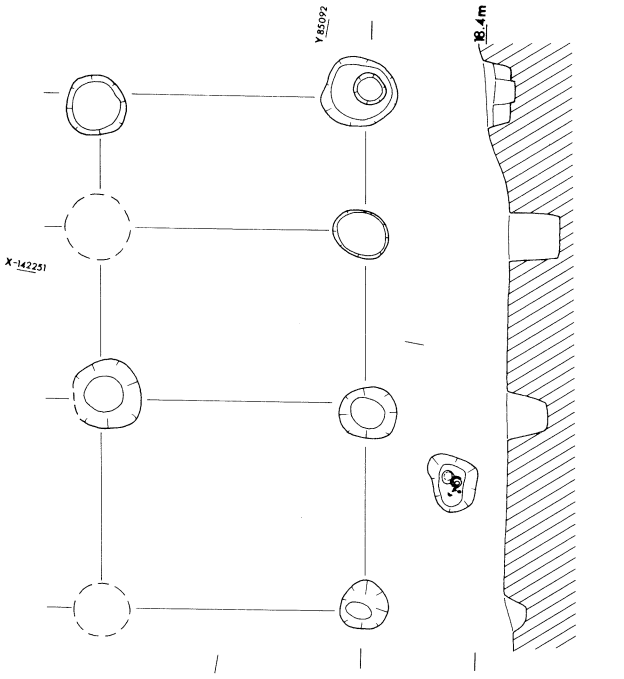


図11　ＳＢ０４　平・断面図

地鎮遺構　　地鎮遺構と考えられるＳＸ01・04は、ＳＢ03・04のそれぞれ東南隅からわずかにはなれた同じような位置に存在する。

ＳＸ０１　　撹乱で明確ではないが、東西方向の浅い楕円形の土坑に、中軸からやや北側にほぼ東西方向に小型の土師器壷を一列に７個体並べ、土師器坏２個体で蓋をするように置かれていた。土師器坏は、西から壷の１個目と２個目の上に１個を、そして４個目と５個目の上にもう１個を被せていた。

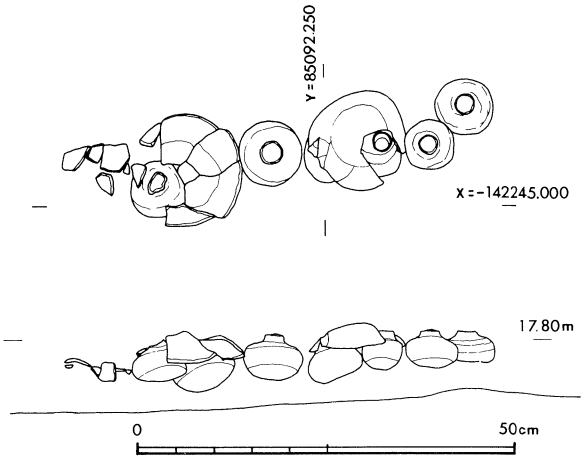


図12　ＳＸ０１　平・立面図

ＳＸ０４　　50×60㎝程度の土坑の中に須恵器壷を正立させ、土師器坏で蓋をしその傍らに土師器坏２個体が重ねて伏せ置かれていた。

第３遺構面の遺構の時期は、その出土遺物、特にＳＸ01・04の遺物から９世紀後半から10世紀前半にかけてのものと考えられる。

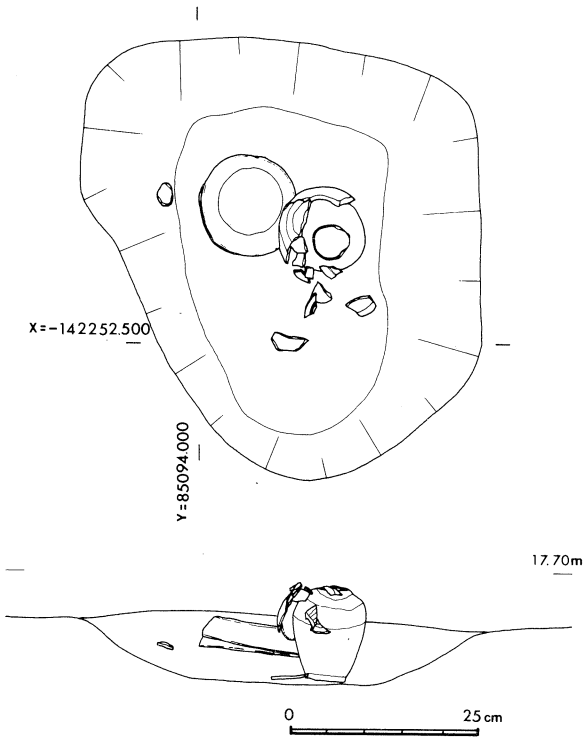


図13　ＳＸ０４　平・立面図

古墳時代後期
（第４遺構面）

第３遺構面の基盤となっていた洪水砂を20～30cm除去すると、黒色砂質シルト層になる。この層位が第４遺構面の基盤になっている。この面での遺構は、調査区南西隅で竪穴住居４棟（ＳＢ05-1・2、ＳＢ06-1・2)が検出されている。

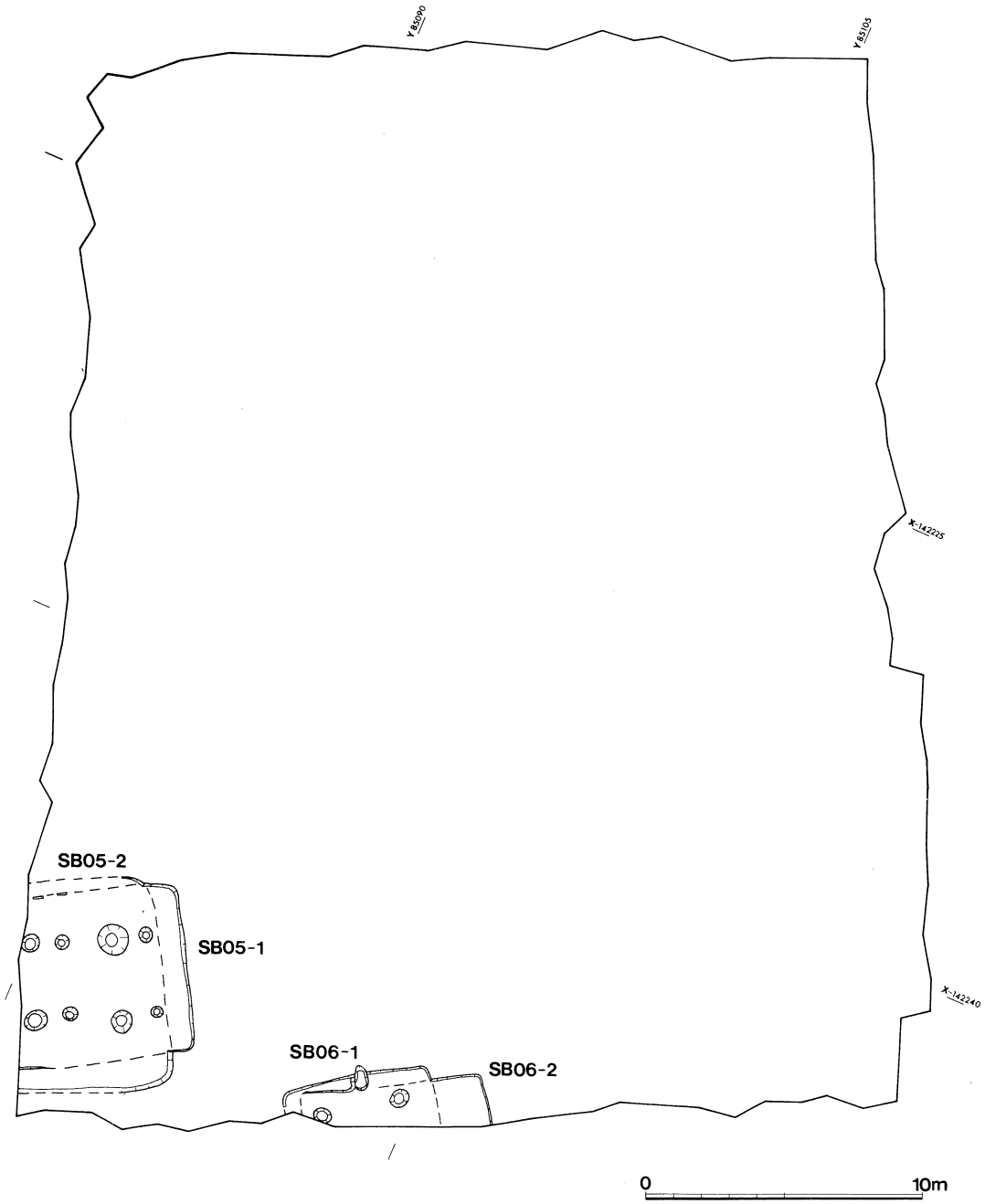


図14　第４遺構面平面図

ＳＢ０５　　ＳＢ05-1・2はいずれも残存状態は悪く、検出面から床面まで５～10cmである。また、後世の撹乱も著しく、多くのピットが重なって穿たれていた。そのため周壁を明確に検出できた部分も少ない。

ＳＢ05-1は、一辺６ｍ程度の方形の竪穴住居で東辺の一部で周壁溝を検出したが、全周していたかどうかは不明である。柱穴は４個で、掘り形の径は50～60cmで、柱間は３ｍ前後である。

ＳＢ05-2は、一辺７ｍ程度の大型の方形の竪穴住居である。柱穴は４個で、掘り形も径0.7～1.0mと大型で、柱間は3.3mである。

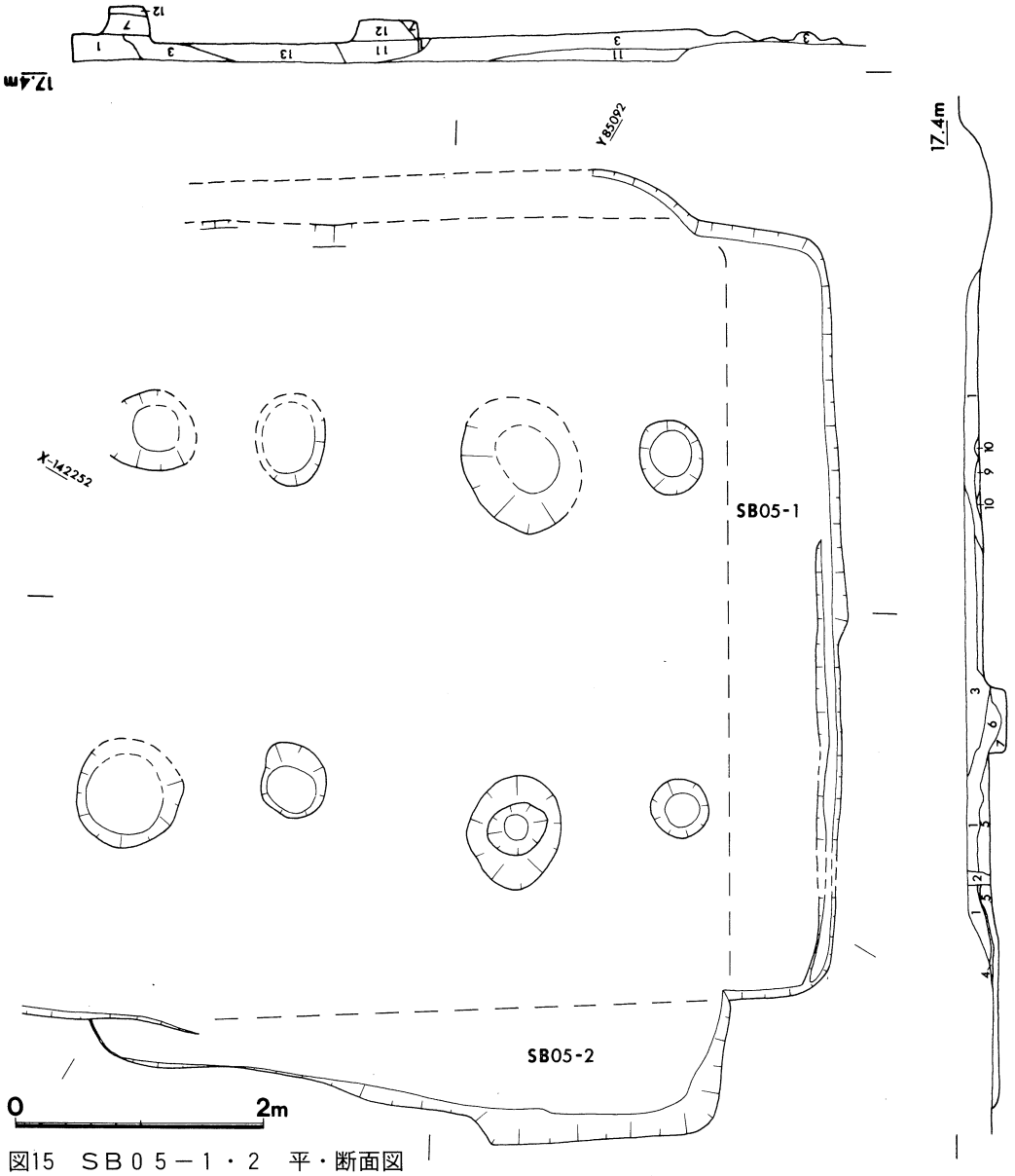


図15　ＳＢ０５－１・２　平・断面図

この２棟の竪穴住居は建て替えと考えられるが、残存状態の悪さから切り合い関係を確認しえず、先後関係はあきらかにできなかった。

出土遺物には、埋土中から須恵器・土師器のほか、刀子状の鉄製品や滑石製の管玉も出土している。

ＳＢ０６　ＳＢ06-1・2もまたともに残存状態は悪く、検出面から床面まで５～10cmである。いずれも住居址の半分以上は調査区外に存在するものと考えられる。

ＳＢ06-1は、一辺5.5m前後の方形の竪穴住居と推定される。柱穴は２個確認でき、掘り形の径は70cm前後、深さは45cm程度で柱間は3.2mである。柱痕跡は確認できたもので径40cmを測る。

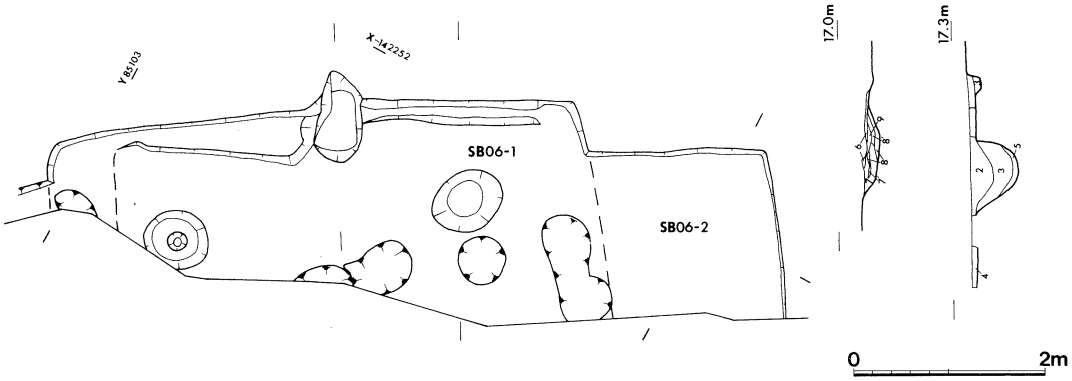
屋内施設としては、北辺中央に造り付けのカマドが設けられている。床面を15cm程掘り込み、粘土壁を構築したと考えられるが、粘土壁は崩れてなくなり、その一部がカマド内に落ち込んでいる。規模は、長さ1.9m、幅1.0mを測る。

ＳＢ06-2は、一辺6.5m程度の方形の竪穴住居と推定される。この住居址に伴う柱穴は確認できなかった。

この２棟の竪穴住居も建て替えと考えられるが、残存状態の悪さから切り合い関係が明確でなく、先後関係はあきらかにできなかった。

遺物はわずかで、須恵器・土師器片が出土している。

ＳＢ05・06の築造は、その出土遺物から６世紀後半と考えられる。また、これらの竪穴住居は洪水砂によって埋没しており、調査区東半に流れる河道もこの時期に完全に埋没している。



1．淡黄褐色砂
2．暗灰色砂（５cm大の礫含む）
3．黒色粘質砂
4．暗灰黒色砂
5．暗黄色砂
6．暗褐色砂質粘土（堅くしまり粘性あり、炭含む）
7．極暗褐色シルト質砂（堅くしまり粘性あり）
7′．極暗褐色シルト質砂（７よりやや色が薄い）
8．暗灰色シルト質砂（堅くしまり粘性あり）
8′．暗灰色シルト質砂（８よりやや色が薄い）
9．灰色シルト質砂（堅くしまり粘性あり、炭若干含む）

図16　ＳＢ０６－１・２　平・断面図

弥生時代中期～古墳時代前期（第５遺構面）

第４遺構面の基盤になっている黒色シルト層は、須恵器をまったく含まない遺物包含層である。これを除去すると褐色シルト混粗砂層を基盤とする第５遺構面となる。

この遺構面では、調査区北半で６棟の竪穴住居を検出している。

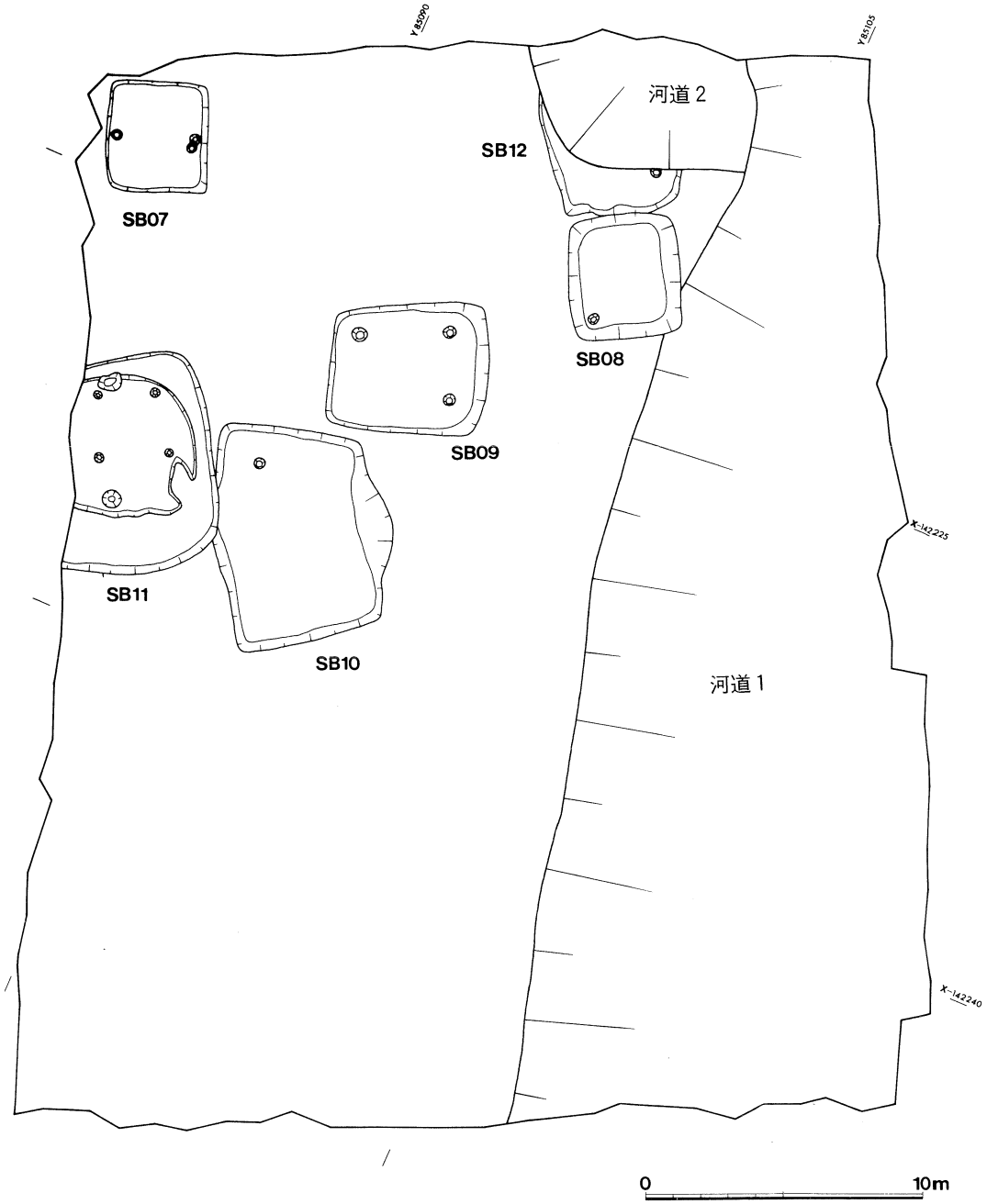
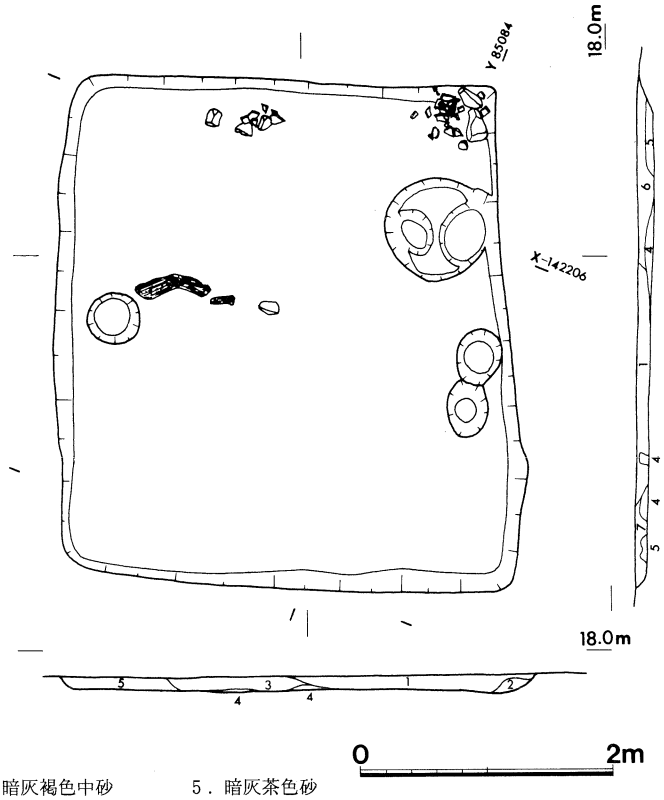


図17　第５遺構面平面図

ＳＢ０７　　3.5×4.0mの方形の竪穴住居である。残存状態は悪く、検出面から10～15cmで床面となる。主柱は２本で、床面には主柱間のおよそ西半分に東西方向に炭化材が認められた。住居址内の北東隅で床面からわずかに浮いた状態で土器が集中して出土している。

出土遺物から弥生時代後期末（庄内式併行期）に属すると考えられる。

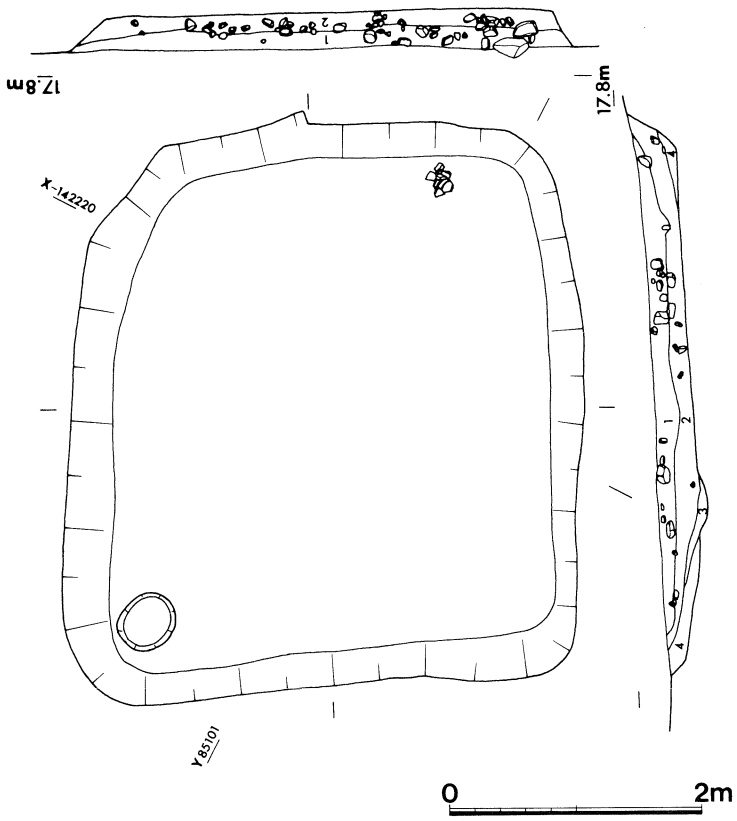


1．暗灰褐色中砂
2．灰橙褐色中砂
3．黒灰色砂（炭含む）
4．灰黄茶色砂
5．暗灰茶色砂
6．灰茶褐色中砂
7．暗褐色中砂

図18　ＳＢ０７　平・断面図

ＳＢ０８　　4.0×4.4mの方形の竪穴住居である。検出面から床面までは30cmと残存状態は比較的良好であるが、主柱となる柱穴は確認できなかった。屋内南西隅に径40cm、深さ５cmの浅い柱穴が検出されているが、主柱を構成するもののひとつとは考え難い。住居址埋土中には５～30cm大の礫が多く含まれていた。埋土が砂礫であることから、洪水により一時に埋没したものと推定される。また、一部が河道上に位置することから、河道はこの時期に徐々に埋没を始めていたようである。

出土遺物から弥生時代後期末（庄内式併行期）に属すると考えられる。



1．暗褐色シルト質粗砂
2．極暗褐色シルト質粗砂
3．黒色シルト質粗砂
4．淡褐灰色粗砂

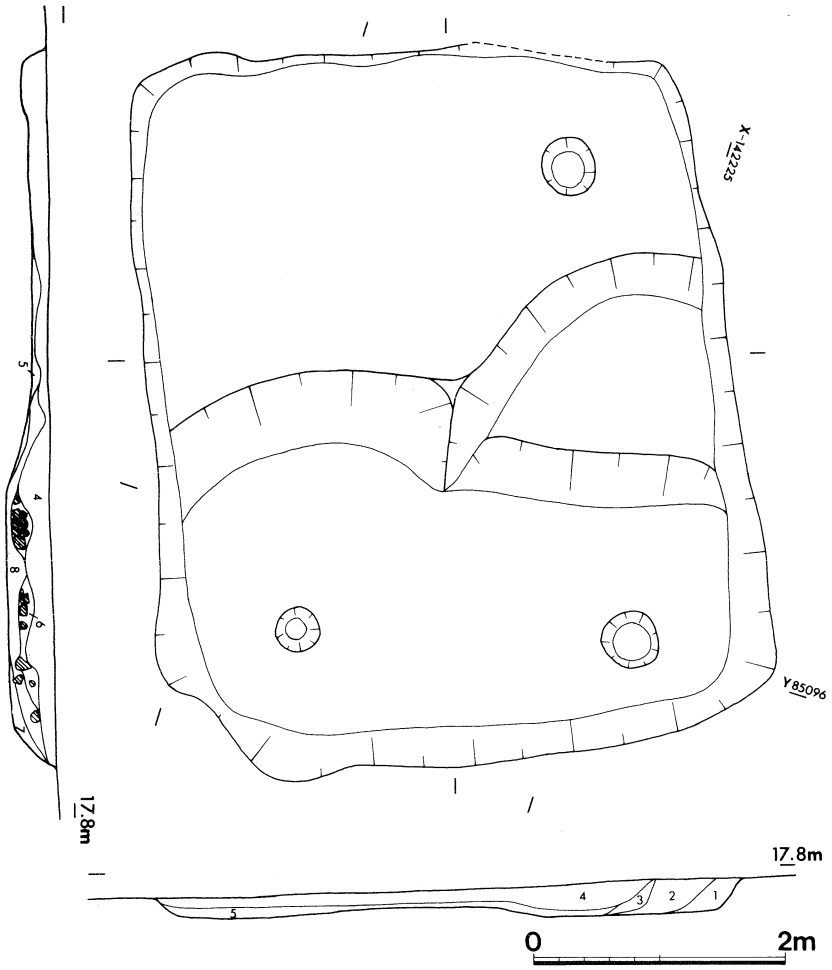
図19　ＳＢ０８　平・断面図

ＳＢ０９　4.6×5.6mの長方形の竪穴住居である。検出面から床面までの高さは約30cm程度であるが、床面の東側の約半分は緩やかに10cm程度高くなっており、さらにその北半分は幅約1.2mをおいて２つの緩やかな段で高くなっている。柱穴は３個検出したが、その配置から本来は４個存在したと考えられる。柱穴の径は40～50cm、深さ10～30cmを測る。床面から太型蛤刃石斧の基部が出土している。出土遺物から弥生時代中期中葉に属すると考えられる。

ＳＢ１０　5.5×7.5mの長方形の竪穴住居である。検出面から床面までの深さは30～40cmで残存状況は良好である。柱穴は１個を確認したに留まり、径50cm、深さ40cmを測る。確認された柱穴の位置から本来は４個以上存在したと考えられる。この竪穴住居は、埋土の観察から廃棄後わずかに土砂が流入した時点で洪水により完全に埋没したことが明らかになった。

床面からは石鏃２点が出土したほか、南西隅には壷形土器が土器下半部

によって蓋をされた状態で出土している。これは、あたかも土器棺のような状態を呈しているが、住居内に据え置かれたものと考えられる。出土遺物から古墳時代前期（布留式併行期）に属すると考えられる。



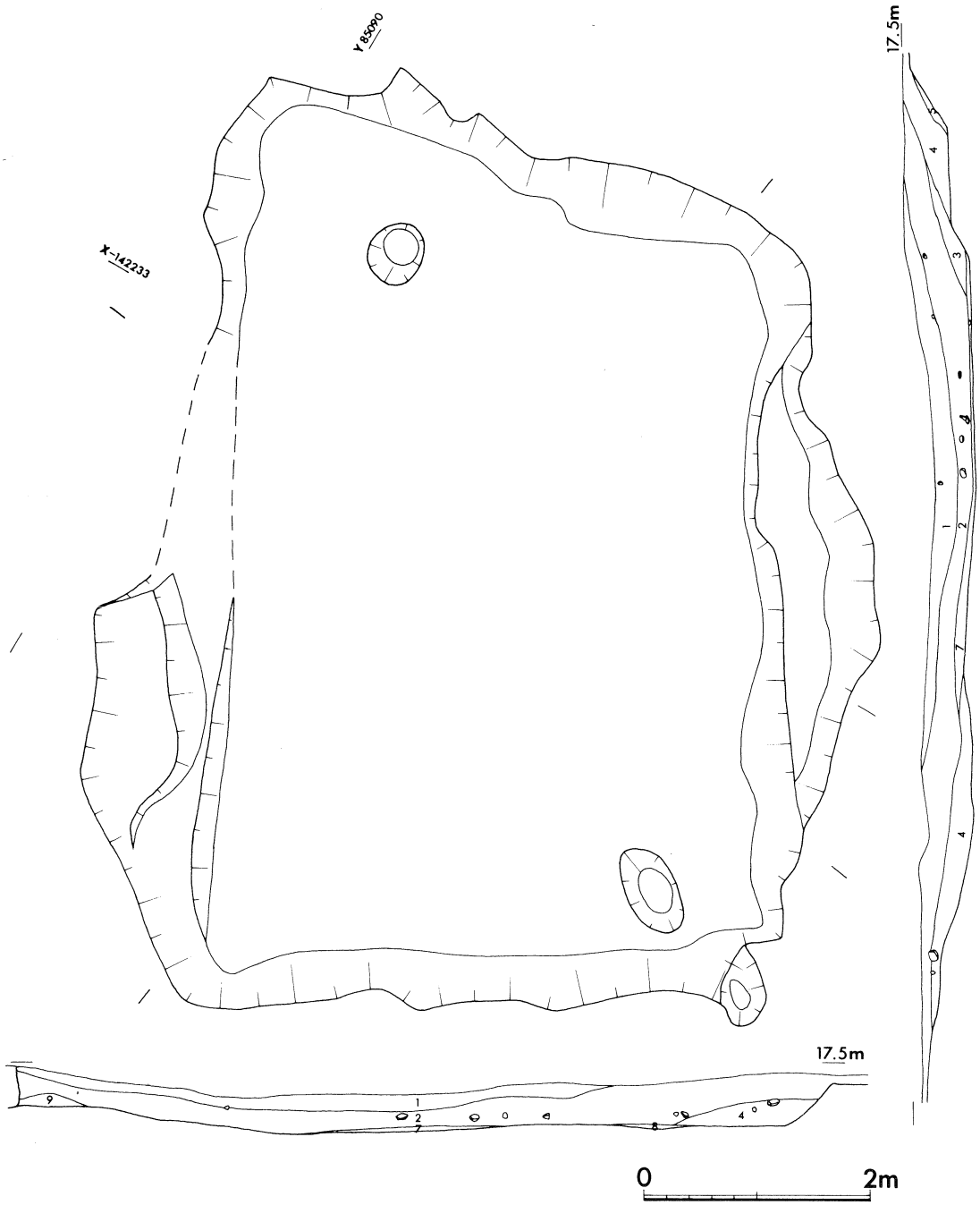
1．茶褐色粗砂　4．黒茶色中砂　7．暗茶褐色砂
2．灰黄褐色粗砂　5．黄褐色粗砂　8．茶褐色砂
3．茶灰色粗砂　6．茶灰色中砂（拳大の礫含む）　9．灰黄色粗砂

図20　ＳＢ０９　平・断面図

ＳＢ１１

一辺８ｍ前後の方形の竪穴住居（ＳＢ11-2）の中に、先行すると考えられる一辺５ｍ前後の隅丸方形の竪穴住居（ＳＢ11-1）が存在している。

ＳＢ11-1は、柱穴は４個で径30～40cm、深さ40～50cmを測る。北辺上と南辺付近に貯蔵穴と考えられる土坑が２基検出されている。北辺側は1.0×0.8mで深さ50cm程の不定形なもので、南辺側は径80cmで深さ40cm程の円形を呈し、中に土器類や礫が入っていた。



1．黒色砂質シルト（堅くしまり粘性あり）
2．暗褐色シルト質砂（堅くしまり粘性弱し）
3．暗褐色シルト質砂（堅くしまり粘性弱し
　　２よりは真砂土の色に近い）
4．暗褐色シルト質砂（堅くしまり粘性弱し
　　１と３の中間的な色調）
5．明黄褐色砂（壁の土くずれ）
6．明黄褐色砂
7．黒色シルト質細砂（堅くしまり粘性弱し）
8．褐色シルト質細砂
9．明褐色砂（地山の真砂土のくずれ）

図21　ＳＢ１０　平・断面図

ＳＢ11-2は、柱穴は２個確認したに留まり、その配置から本来は４本柱であったと考えられる。床面には、小型の壷形土器のほか砥石が残されていた。

出土遺物からいずれの住居址も庄内式併行期から布留式併行期と考えられる。ＳＢ11-1と２の先後関係については、土層の観察からは明確にしえなかったが、出土土器からＳＢ11-1が２に先行するものと考えられる。

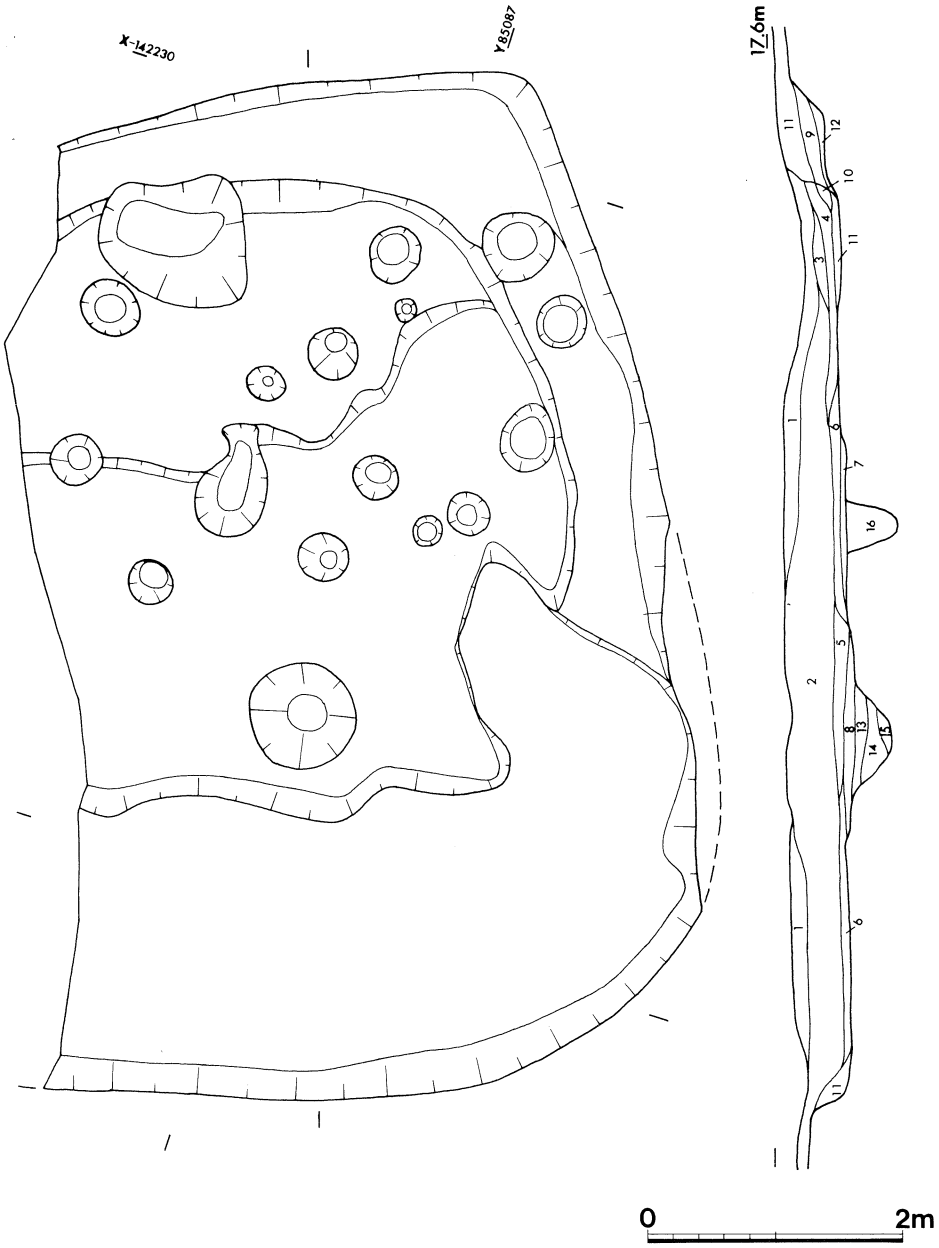


図22　ＳＢ１１　平・断面図

ＳＢ１２　　検出状況から方形にみえるが、径６ｍ程度の円形の竪穴住居であったと考えられる。大部分は河道によって削り取られて失われている。柱穴は１個を確認したに留まる。大きさは径55cm、深さ20cmを測り、底に扁平な礫１個が入っていた。

出土遺物から弥生時代中期前半に属すると考えられる。

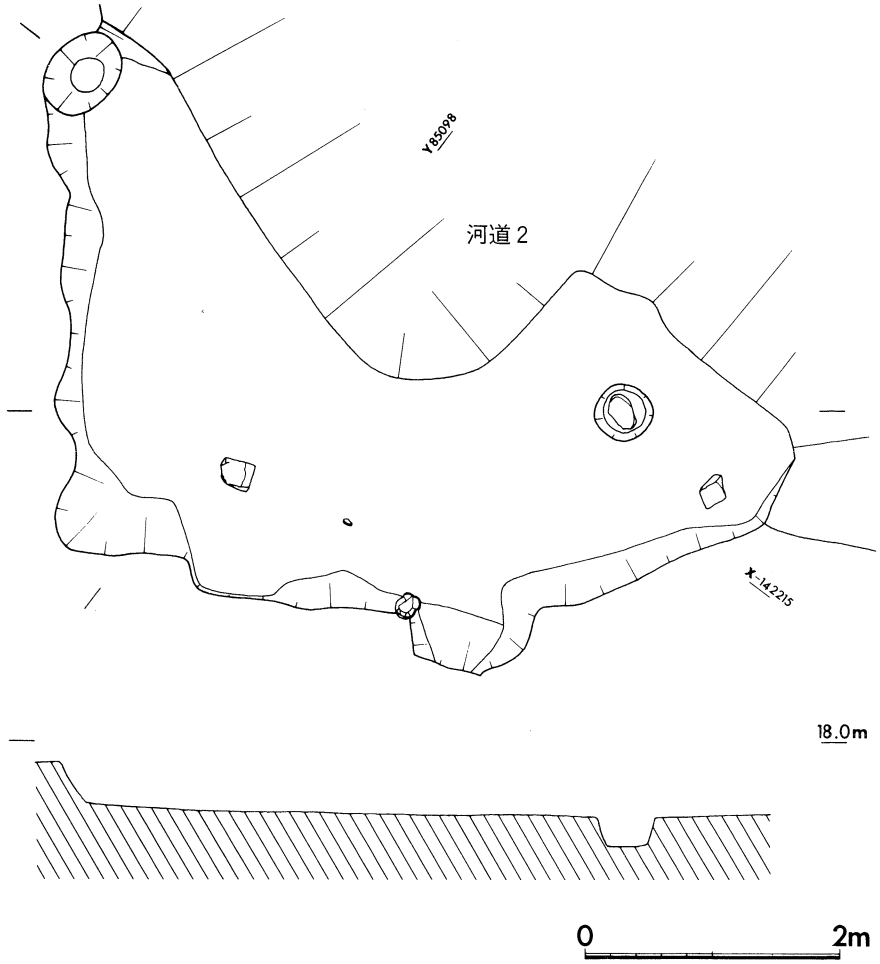


図23　ＳＢ１２　平・断面図

地震跡（噴砂）　　第２～３遺構面上で調査区全域に多数のひび割れを検出した。寒川旭氏の現地調査により、噴砂であることが判明した。噴砂とは、地表面下の比較的浅い場所に堆積した砂層が、水で満たされた状態で強い地震動（震度５～６）を受けた際に発生するもので、砂と水が混じりあって高圧の液体となった液状化層の上に粘土のような水を通さない層が覆っていると、砂と水がこれを引き裂いて地上に噴出するとされている。第１遺構面の精査

時には噴砂遺構の存否確認をし得ていないので、どの遺構面が地表の時に起きたかは確定できないが、1596（慶長元）年に京都から神戸にかけて起きた伏見地震によるものと推定されている。

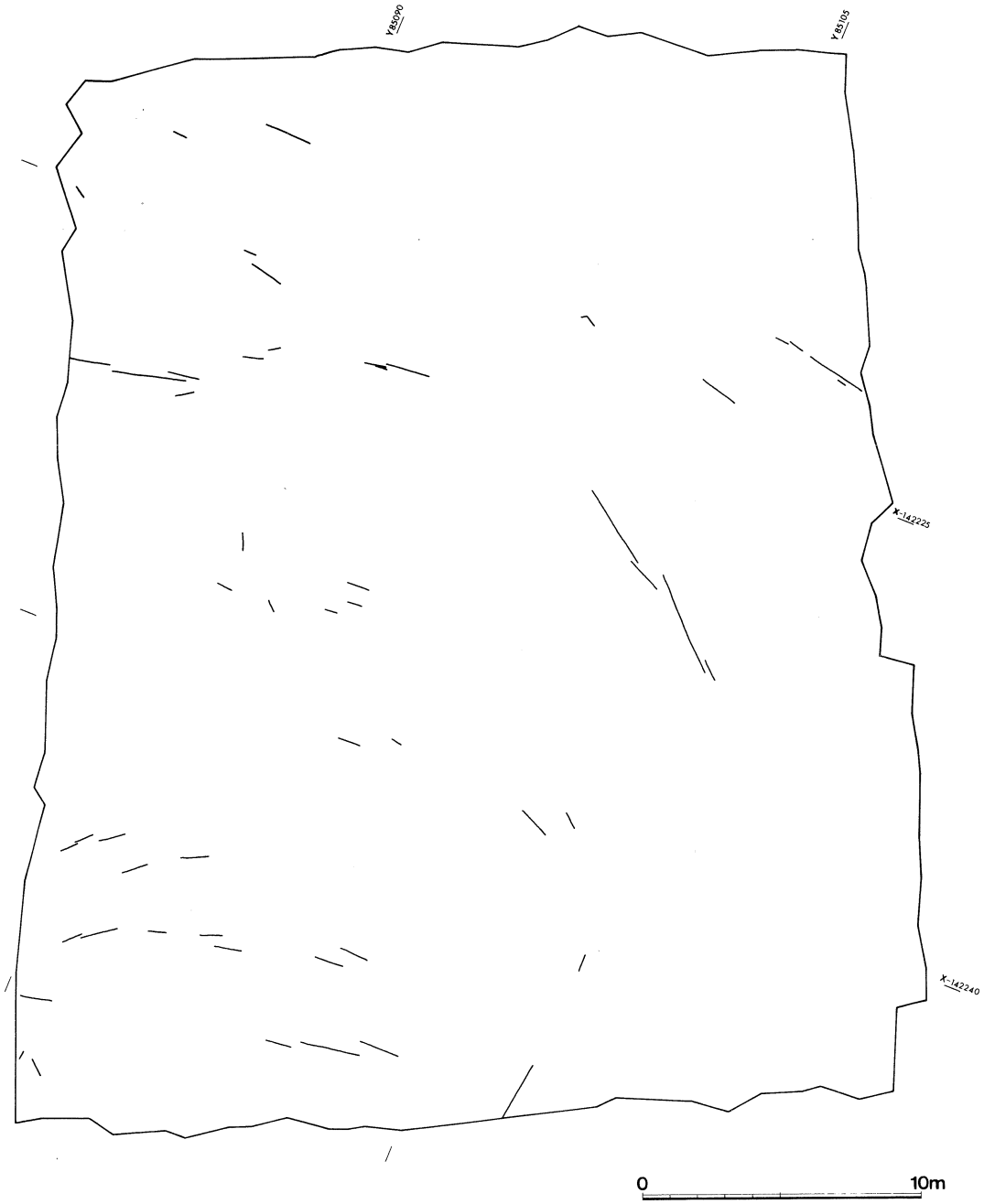


図24　砂脈と噴砂の分布図

第4章　遺　　物

出土遺物は調査面積、遺構の量に比べ僅少である。また、それらの大部分は小片で、図化し得るものは少ない。以下、上層出土遺構より順を追ってその概要を記す。

ＳＢ０１－１
（図25・26）

当掘立柱建物が補修された際に、柱穴内に破砕し、埋めこまれた土器類である。

（１・２）は東播系須恵器の椀で、口縁部は外反し、体部中位に沈線を１条巡らす。また、回転糸切り離しされた底部の突出（平高台）は大きく明瞭で、その内面は一段窪む。

（４）は器壁の厚い黒色土器椀で、内外面とも残存状態は悪いものの、細かく密なヘラ磨き調整が認められる。口縁部外面はわずかに窪ませ、内面は細い沈線状の窪みを巡らす。高台は残存が悪いが、おそらく断面三角形であろう。

（５）は灰釉陶器椀（山茶椀）で、口縁部は外反し、体部は直線的で、厚い底部に三日月高台をつける。器壁にヘラ削り調整は認められない。内面にわずかに残る釉は灰緑色である。

（７）はいわゆる「て」の字状口縁の小皿に類似するものである。やや厚手で、底面付近には指圧痕を残す。

（８）は白磁碗で、口縁部の玉縁は削り出しではなく、折り返しによって形作っており、わずかな中空部が存在する。釉色は青色を帯びた灰白色である。

（９）は須恵器鉢で、口縁端部は外方へ三角形に突出し、体部上位に稜をもつ。器壁はよく焼け締まっている。

（11）は土師質の羽釜で、口縁部の立ち上がりは内弯し、端部は偏平でわずかに窪ませる。また、鍔部は短くやや下方に下がる。

（12）は土師質の鉢ないしは鍋であろう。口縁部は「く」の字形に屈曲させる。同一個体と推定される底部付近の破片には、格子目叩きがみとめられる。

（13）は大型の須恵器甕で、高さ73.6cm、最大径66.7cm、口径38.4cmを測る。口縁部は内面に窪みをつくり、小さくつまみ上げる。器壁外面は平行叩き目で覆われ、内面は磨り消されている。底部から1/4程度のところに、分割成形の痕跡が明瞭に残る。東播系須恵器であろう。

（３）は補修を受けていない柱穴掘り形内から出土した須恵器である。

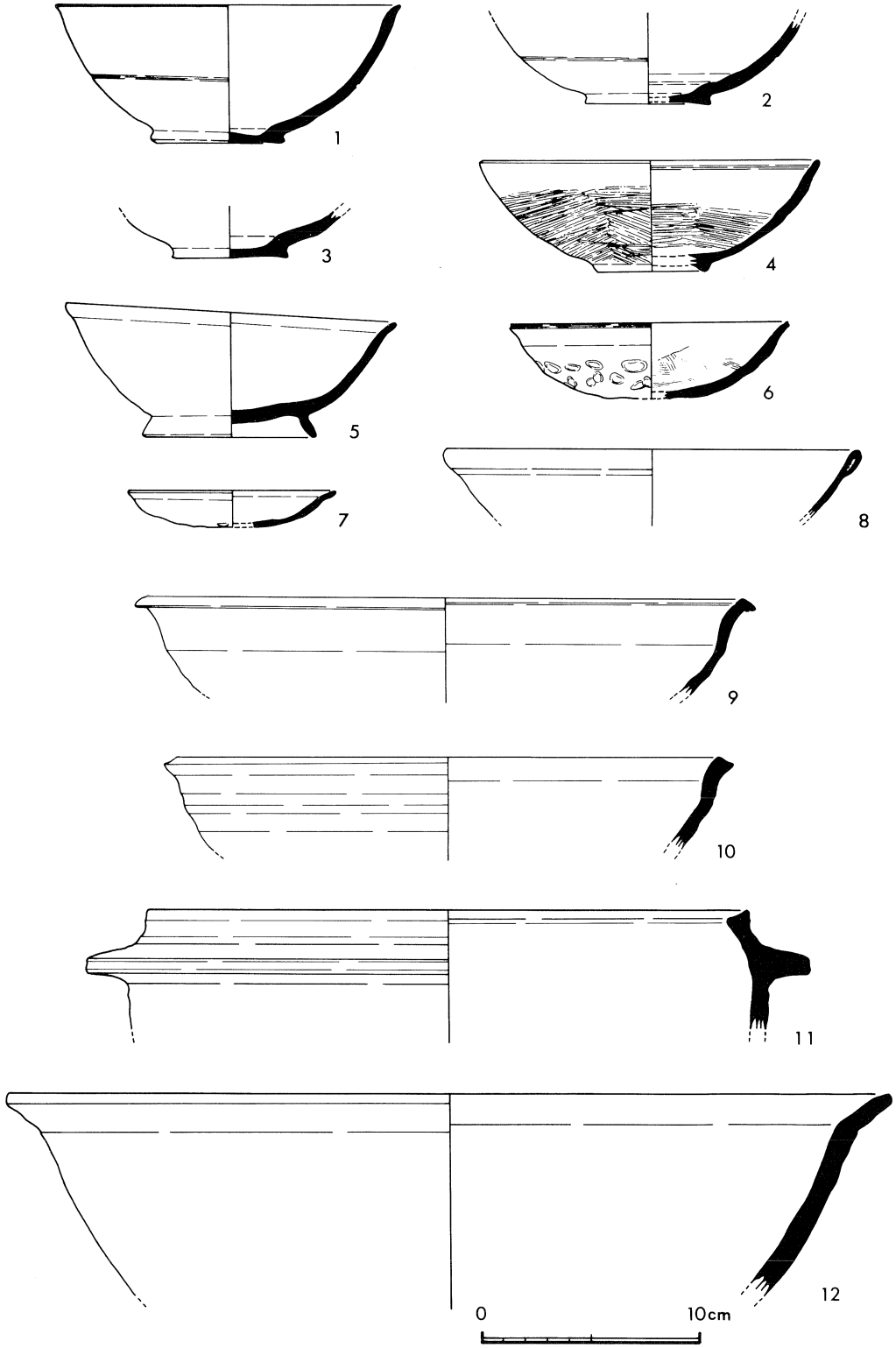


図25　ＳＢ０１　出土土器（１～12）

その形態・調整は、（１・２）と同様である。

（10）は包含層出土の須恵器鉢である。口縁部は外方へ肥厚させ、上面は平坦である。神出古窯址群では（１～３）の須恵器椀と伴出する。

以上は、ＳＢ01―１の隣接する３箇所の柱穴内より出土したもので、相互に接合する資料が存在することから、同時に埋められたものである。また、これらの土器の所属時期は11世紀中葉であると考えられる。

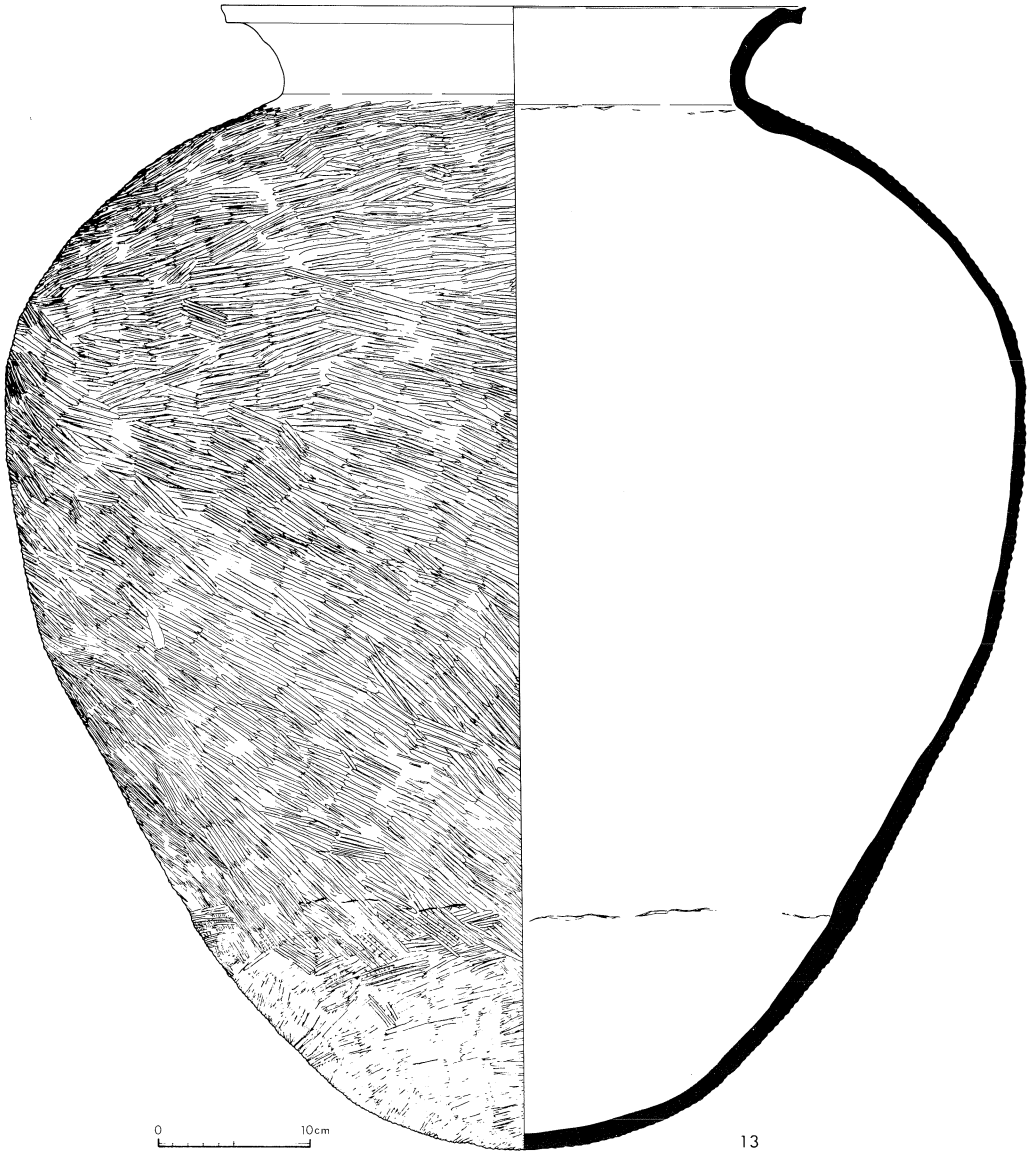


図26　ＳＢ０１　出土土器（13）

ＳＢ０１－２（図25－６）　形態の判明する資料は１点のみで、（６）の土師器皿である。口縁端部は面をつくり、その下はわずかに窪ませる。器壁内面は刷毛目調整を施し、外面は指圧痕を残す。

１点の資料からの時期判定は困難であるが、10世紀後半のものとしておきたい。

ＳＸ０１（図27）　地鎮遺構と考えているもので、土師器小型壷７点、土師器坏２点が出土している。

（１）は底部からやや内弯気味に立ち上がる坏で、器壁は厚い。内面はロクロナデの痕跡が認められるが、外面は不明である。また、底部の切り離し手法も不明瞭である。

（２）は底部から直線的に立ち上がり、口縁部付近で内弯させる。口縁端部は内外面とも強くナデ窪ませ、うすく仕上げている。器壁内面は、横方向のナデ調整を施し平滑であるが、外面の調整は不良で凹凸が著しい。

（３～９）は土師器の小型壷である。底部よりロクロ挽きによる成形を行った後、肩部より下方はヘラ削り調整を施している。

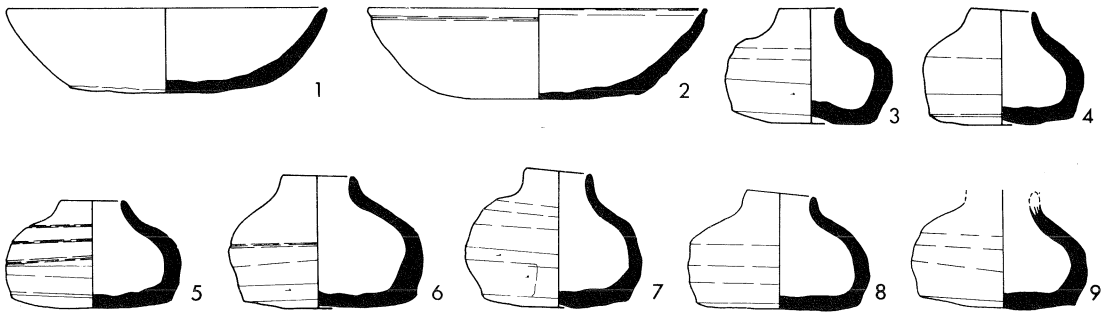


図27　ＳＸ０１　出土土器（１～９）　0　10cm

ＳＸ０４（図28）　地鎮遺構と考えているもので、須恵器壷１点、土師器坏３点が出土している。

（１）は頸部に接合点は無いものの、同一個体と考えられる。口縁部は外方へ突出させ面をつくる。端部は尖り気味におさめる。体部はロクロ目を残し、肩部はほとんど張らない。底部は、回転糸切り離し痕を残す。

（２・３）は重なって出土した土師器坏で、形態・法量・調整のいずれも同一である。底部から直線的に立ち上がり、口縁部下でわずかに稜をつけ、内弯させる。内外面ともロクロナデを施し、底部は回転ヘラ切り離しである。

（４）は口径が（２・３）を上回るが、形態・調整は同様である。

ＳＸ01・04出土遺物の時期、ひいてはＳＢ02～04の構築時期については

出土器種が特殊であるため、他の例との比較は困難である。ただ、ＳＸ04出土の図28－１の須恵器壷は一般的に見られ、９世紀末から10世紀初頭に位置付けられるものであろう。

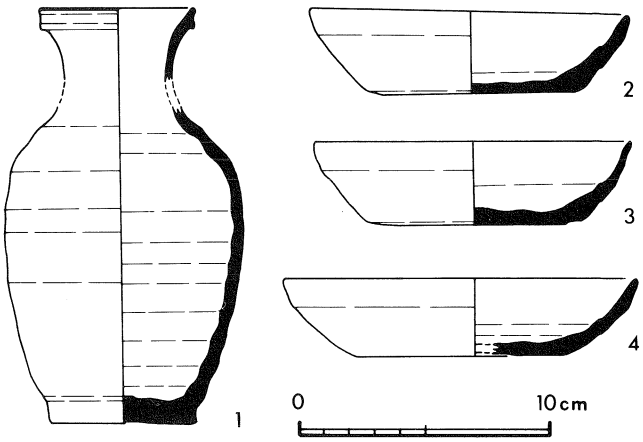


図28　ＳＸ０４　出土土器（１～４）

ＳＢ０５　　図化し得たのは（１・２）の須恵器のみである。

（図29－１・２）　（１）の須恵器坏身は、外面のヘラ削り調整は上位まで施されているが受部の立ち上がりは大きく内傾し、端部は丸くおさめる。

（２）は須恵器短頸壷で、体部下半にはヘラ削り調整が施されている。

いずれも、Ⅱ型式４～５段階（中村浩編年）に属するものであろう。

ＳＢ０６　　この竪穴住居も遺物が僅少で、図化し得たのは２点のみである。

（図29－３・４）　（３）の須恵器坏身は、外面のヘラ削り調整を下半のみに施し、受け部の立ち上がりは大きく内傾し、端部は丸くおさめている。

（４）は土師器甕で、口縁端部は面をつくるが、内側への肥厚はさほど大きくない。体部外面には細かいハケ目調整が施され、頸部内面は同様のハケ目調整を、体部は軽いヘラ削り調整を施す。

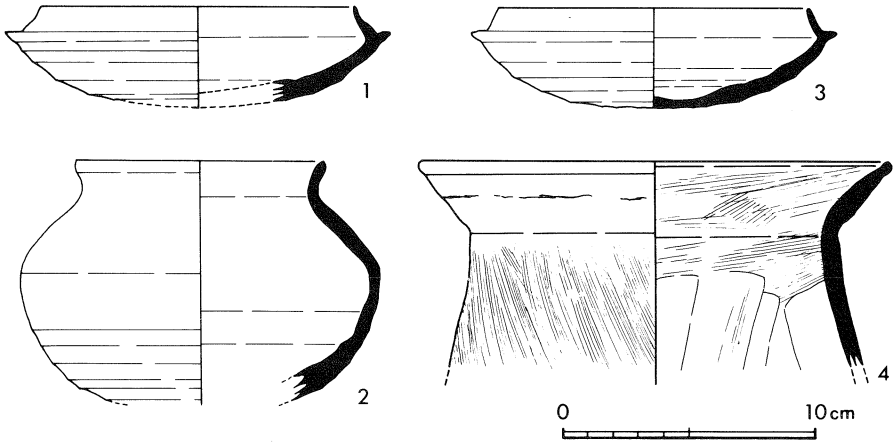


図29　ＳＢ０５・０６　出土土器（１～４）

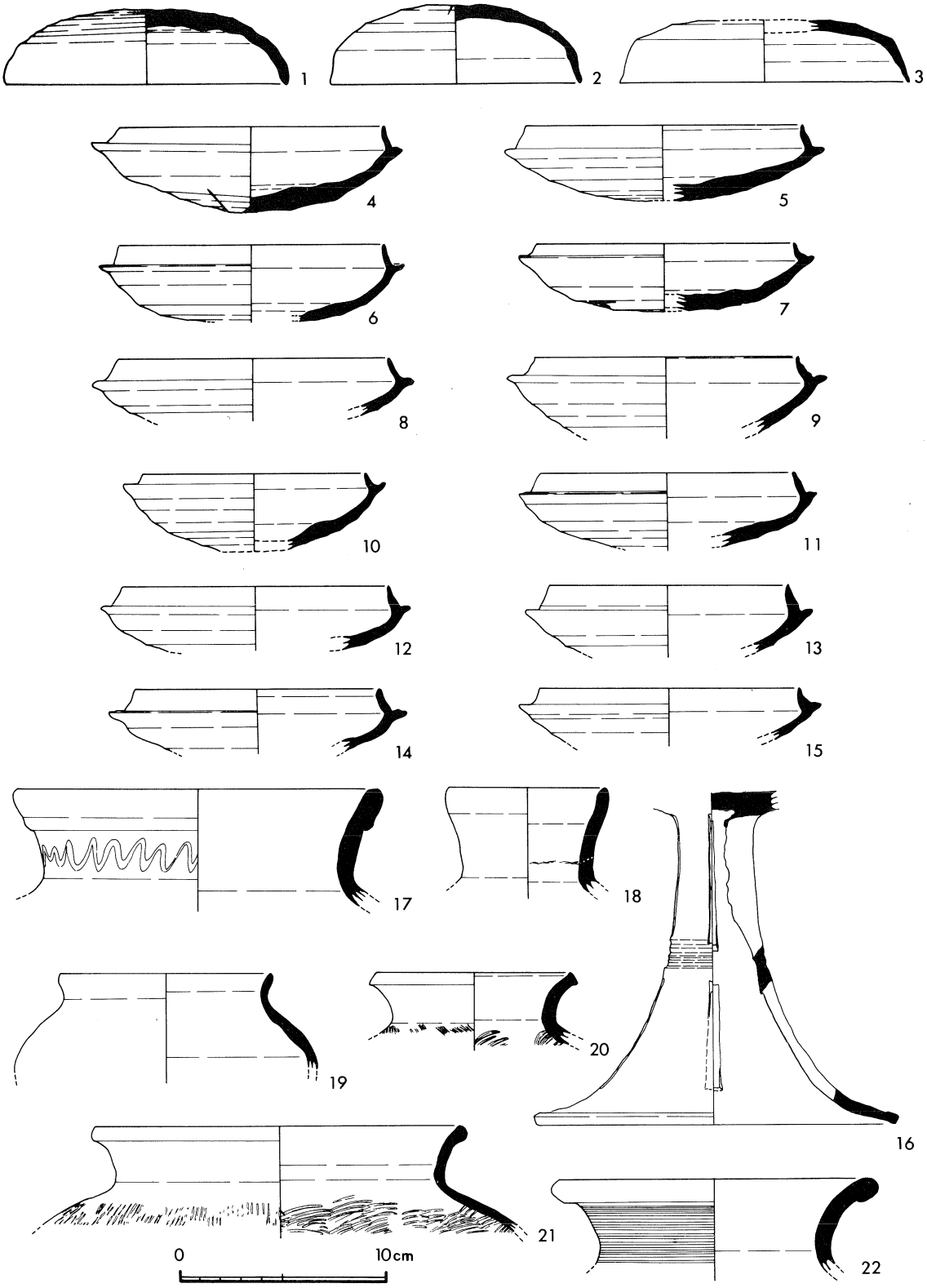


図30　包含層出土土器（1～22）

包含層（図30）　（1～22）は、ＳＢ05・06を覆う洪水砂中に包含されていた須恵器である。いずれもⅡ型式４～５段階に属すると考えられる。２・４・10の須恵器坏蓋・坏身の外面にはヘラ記号が認められる。

ＳＢ０７（図31）　（１）は無紋の壺形土器で、肩部には横方向の、それ以上には縦方向のハケ目調整が施されている。内面の調整は不良で、粘土紐の接合部や凹凸が残る。ＳＢ11出土の破片と接合があり、生駒西麓産の胎土である。

（２）は頸部から直線的にのびる口縁部をもつ壺形土器である。内外面ともヘラ磨き調整を施し、口縁端部は丸くおさめる。

（３）は平底の鉢形土器で、体部内外面ともナデ調整で凹凸を残し、口縁部のみ横ナデ調整を施す粗雑なつくりである。底部外面には木の葉の圧痕が認められ、底・体部の境は横方向のヘラ磨き調整を施し、面取りを行っている。

（４）も（３）と同形態の鉢形土器で、外面はナデ調整を施しているがタタキ目を残し、内面は板状工具によるナデ調整を施している。

（５）はごく小型の鉢形土器で、これもまた粗雑なつくりである。体部内面は板状工具によるナデ調整、外面はナデ調整、口縁部は軽くヨコナデ調整を施している。

（６）は小皿とでも呼べそうな小型で浅い手づくねの土器である。内外面ともナデ調整のみで、口縁部のヨコナデ調整も施していない。

（７）は（３・４）と同形態の鉢形土器の底部で、外面には叩き目を残し、内面は板状工具によるナデ調整を施している。

（８）は鉢ないしは甕形土器の底部で、外面は叩き目を残し、内面は板状工具によるナデ調整を施している。底部は外面中央部が窪み、輪台技法によるものと推定される。

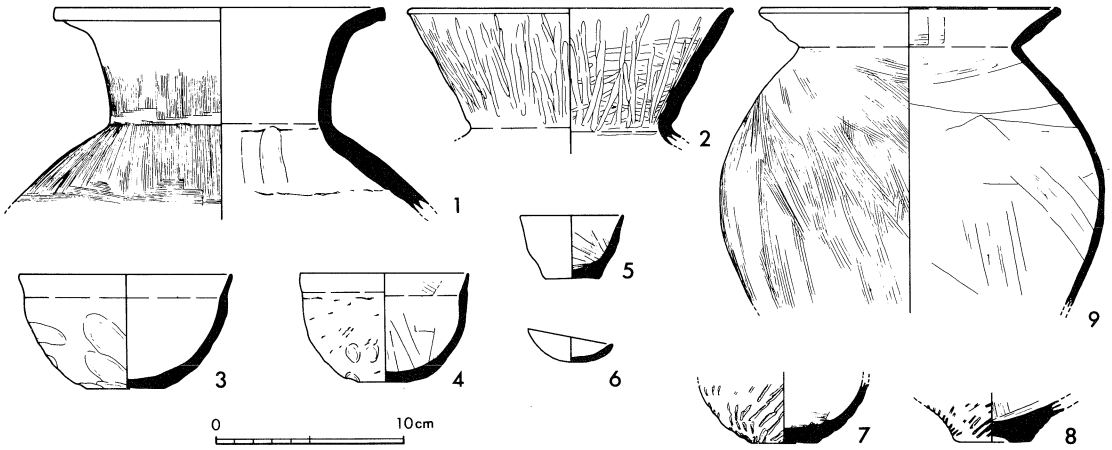


図31　ＳＢ０７　出土土器（１～９）

（9）は甕形土器の上半部で、外面の肩部以下は縦方向、以上は横方向のハケ目調整を施す。内面は肩部以下が縦方向、以上は横方向のヘラ削り調整を施す。ヘラ削り調整は、頸部の屈曲部より3～5㎜下で止められているため、稜は鋭くない。口縁部端面は内側に丸く肥厚させる。

これらの出土遺物は庄内式併行期に属すると考えられる。

ＳＢ０８（図32）

（1）は平底の鉢形土器で、内外面とも板状工具によるナデないしはハケ目調整を施している。

（2）は甕形土器の上半部で、右上がりの太い叩き目調整を施し、その後、部分的に板状工具によるナデ調整を施している。内面はヘラ削り調整を施し、ＳＢ11-9と手法・形態は類似するが、胎土は全く異なる。口縁端部は尖り気味におさめている。

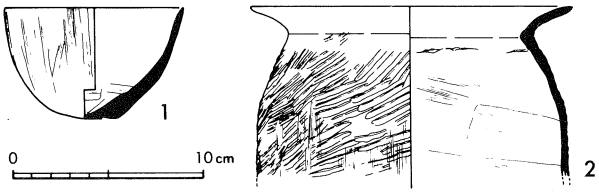


図32　ＳＢ０８　出土土器（1・2）

これらの出土遺物は庄内式併行期に属すると考えられる。

ＳＢ０９（図33）

（1）は大型の壷形土器の口縁部である。口縁端部は粘土を貼り足すことによって大きな面をつくり、繊細な櫛描波状紋を施す。頸部は櫛描直線紋を3帯以上巡らす。

（2）は頸部の短い無紋の壷形土器で、外面はハケ目調整の後ヘラ磨き調整を、内面はナデ調整を施している。外面には煤の付着が認められるが内面の一部にも認められるため、破片となってからのものである可能性が高い。

（3）は甕形土器で、外面はハケ目、内面はナデ調整を施す。口縁端部

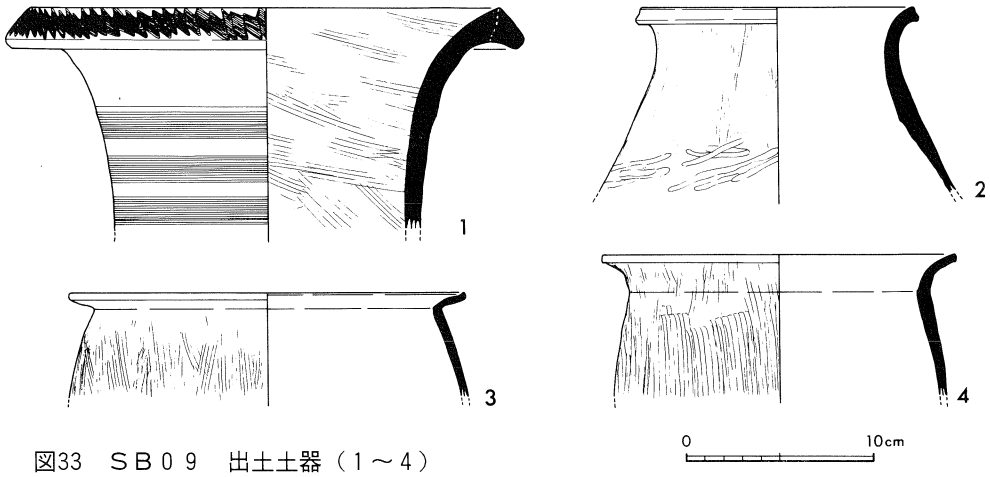


図33　ＳＢ０９　出土土器（1～4）

は上方へわずかにつまみ上げるように肥厚させる。

（4）も甕形土器であるが、頸部に稜がなく、外面は口縁端部直下から粗い縦方向のハケ目調整を施している。また、口縁部内面には横方向のハケ目調整の痕跡が認められる。大和型の甕であろう。

以上の他に、壷形土器の体部の破片で、櫛描直線紋を数帯巡らせた下に竹管刺突紋を2列に施したものや、櫛描直線紋・波状紋を繰り返すものなどがある。

これらの出土遺物は、第Ⅲ様式古段階に位置付けられよう。

ＳＢ１０（図34）

（1）は球形の体部に、よく締まった頸部から直線的に開く口縁部をつける壷形土器である。体部は内外面ともハケ目調整、ないしは板状工具によるナデ調整を施しているが、粘土紐の接合痕を残すなど粗雑な調整である。また、体部下半には煤が付着し、当初より煮沸用として作られたものであろう。

（2）は最大径は上位にあるものの、球形の体部で、直立する頸部に外反する口縁部をつける。体部から底部にかけて叩き目を明瞭に残すが、その痕跡は全体に認められる。外面上半は叩き目調整の後、ハケ目調整を施し、内面はハケ目調整ないしは板状工具によるナデ調整を施している。

出土状況は、（9）を蓋にして壷棺様に埋置されていた。

（3）は壷形土器の口縁部で、ヨコナデ調整の後、間隔の広い縦方向のヘラ磨き調整を施している。胎土中に赤クサリ礫を多く含む。

（4）は大きく開く壷形土器の口縁部で、端部は上方へ肥厚させる。その内側及び端面には櫛描波状紋を巡らせる。内外面ともヘラ磨き調整を施している。

（5）は小型丸底壷で、外面はあまり丁寧ではないヘラ磨き調整を、内面はナデ調整を施している。頸部は指幅で太い凹線状にくぼみを巡らし、その上部を突帯状に成形している。

（6）は小型の器台で、受部は丸みをもった立ち上がりをみせ、口縁部端面には1条の擬凹線を巡らせる。脚部は直線的に広がり、4方向に円孔を穿つ。調整は受け部内面では放射状のヘラ磨きを、脚部外面は細かく丁寧なヘラ磨き調整を施している。この調整及び緻密な黄褐色の胎土は在地産には見られないものである。

（7）は、径は大きいが高さのない脚台部で、上部が鉢であるか壷であるか不明である。全体に粗雑なつくりで、外面はハケ目の後ナデ調整を、底部内面はヘラ磨き、脚台部内面はハケ目調整を施している。

（8）は甕形土器の口頸部で、体部外面は叩き目、内面は板状工具によ

るナデ調整を施している。口縁部端面は尖り気味におさめている。

（9）は壷ないしは甕形土器の下半で、わずかに底部の平坦面を残す。分割成形による鉢部は、叩き目を明瞭に残すが、その上部はナデ消されている。また、この部分は胎土の色調が全く異なっている。（2）の蓋として住居址の隅に埋置されていた。

これらの出土遺物は、庄内式の新段階併行期であろう。

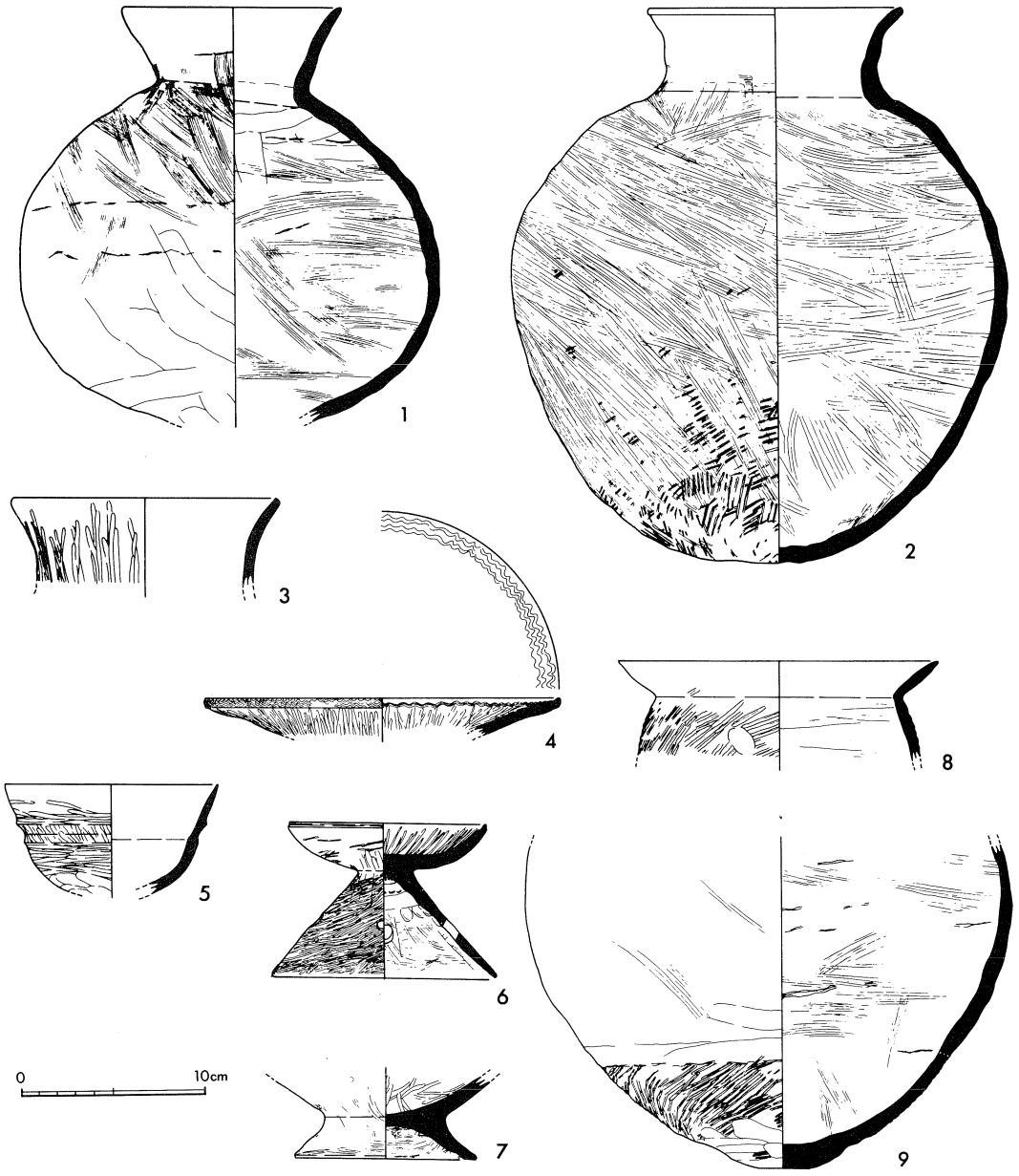


図34　ＳＢ１０　出土土器（1～9）

ＳＢ１１
（図35･36･41）

（１）は小型の壷形土器で、口縁部は明瞭ではないが、二段につくっている。その外面には櫛描波状紋を巡らし、それ以下には施紋は認められない。口縁部内外面及び頸部以下の外面はヘラ磨き調整を施すが、全体には粗雑な調整である。

（２）は平底で小型の壷形土器である。全体にナデ調整のみ施されており、器表の凹凸が著しい。

（３）は壷形土器の底部で、小さな突出する平底をつける。外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整を施す。胎土中には１～３㎜の砂粒を多く含む。

（４）は高坏形土器の坏部と考えられる。内外面とも丁寧なヘラ磨き調整を施す。

（５）は高坏形土器であるが、坏部底にある円孔には粘土を充塡した痕跡は認められない。坏部下半は水平ではないが、さほど内弯せず、上半は直線的に大きくのびる。内外面ともヘラ磨き調整を施しているが、粗雑で胎土中にも１～３㎜の砂粒を多く含んでいる。

（６）は小型の甕形土器で、やや尖り気味の底部をもつ。体部下半は叩き目をナデ消しているが、上半はそのまま残している。口縁端部は面をつくり、刻み目を施している。胎土中には赤クサリ礫が含まれる。

（７）の甕形土器は、口縁部叩き出し手法による叩き目を頸部以上に明瞭に残している。体部の叩き目は、最大径の部位以下は水平方向に、以上は右上がりに施している。内面は板状工具によるナデ調整である。

（８）の甕形土器も頸部以上にまで叩き目を残している。また、体部上半の叩き目は細く水平方向に、下半は太く右上がりに施している。内面は板状工具によるナデ調整を施している。

（９）の甕形土器は外面に叩き目調整を施している。内面はヘラ削り調整を施しているため、頸部下１㎝あたりで稜がつく。

（10）の甕形土器は細かい左上がりの叩き目調整を施し、頸部以上にもそれを残している。内面は右上がりのハケ目調整を施し、口縁端部は上方に肥厚させ面をつくっている。

なお、ＳＢ07-1は当住居址出土の破片と接合している。

以上の他に図化し得ない破片で下記のものがある。

壷形土器口縁部で、受口状の外面には振幅の大きな櫛描波状紋を施したもの（図36－１）。

壷形土器の口縁部を上下方に肥厚させ、あるいは下方に垂下させ、竹管紋を施したもの。

二段に外反させた壷形土器口縁部の内外面に櫛描波状紋を施したもの。

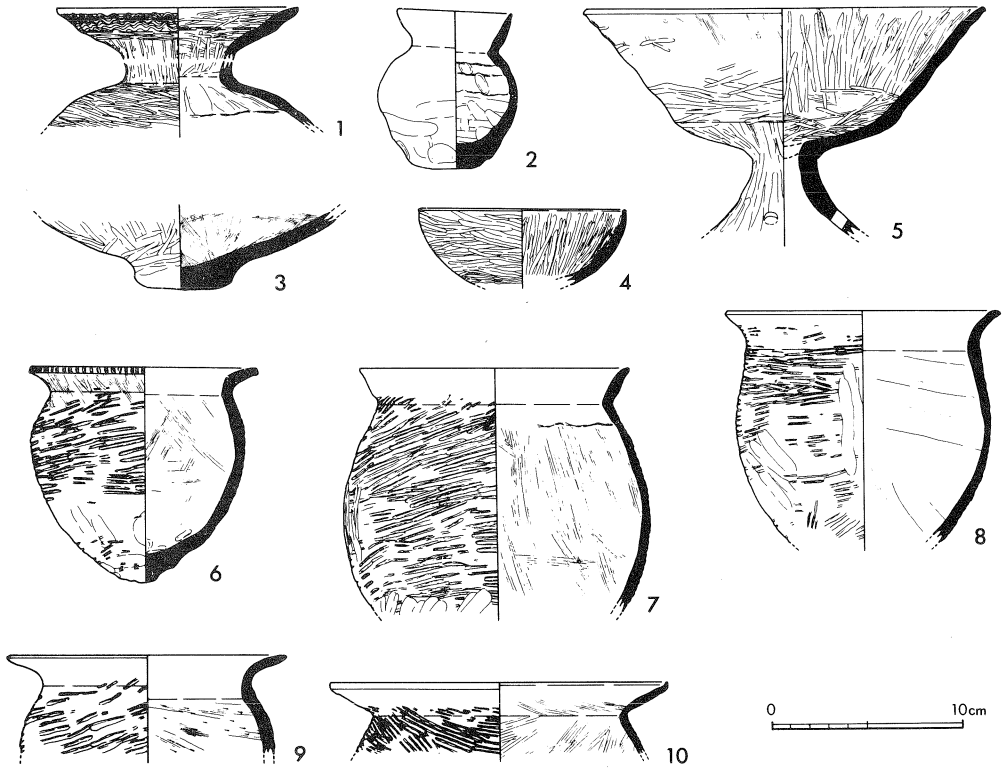


図35　ＳＢ１１　出土土器（１～10）

壷形土器頸部に刻み目を施した断面四角形の突帯を巡らしたもの。

壷形土器体部中位の突帯間に竹管で同心円紋をつくり、沈線によって連続渦紋に擬している。また、突帯上方の沈線紋間に楔形の列点紋を施している。胎土中には黒色の鉱物粒を含み、その色調は茶褐色で、一見生駒西麓産の胎土に似る（図36－２）。

小さな平底を突出させ、その周囲に沈線３条を巡らすもの。胎土は、先の（図36－２）の土器と同じである（図41の底部）。

甕形土器の口縁端部に２条の擬凹線を巡らし、内面は頸部直下からヘラ削りを施すもの。

これらの出土遺物は、庄内式併行期に属するものであろう。

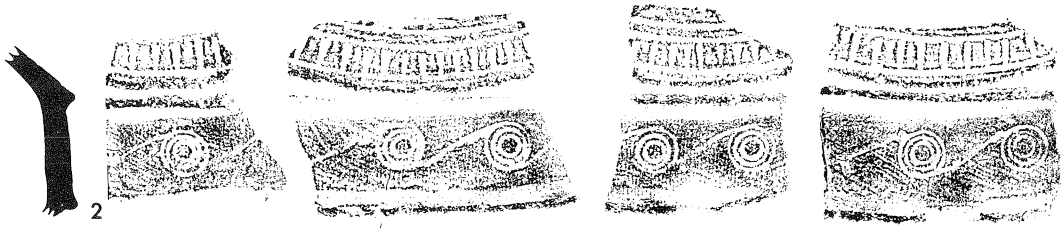


図36　ＳＢ１１　出土土器拓影（Ｓ＝１：２）

ＳＢ１２
（図37）

（１）は細く長い頸部をもつ壷形土器で、口縁部から体部の間に６帯の櫛描直線紋を巡らす。生駒西麓産の胎土であるが、器表にヘラ磨きは認められず、わずかにハケ目の痕跡が認められる。

（２）は太い頸部に櫛描直線紋２帯以上を巡らす。内面には粗いハケ目調整が施されているが、外面は不明である。胎土中には１～２㎜の砂粒が多量に含まれている。

（３）は無紋の壷形土器で、外面にはわずかにハケ目、ヘラ磨き調整が認められる。胎土中にはやはり粗砂粒を多量に含むが、色調は（２）とは全く異なる。

（４）は（３）と同形態の壷形土器であるが、調整は全く不明である。

（５）は口縁部が直立し、頸部の短い壷形土器である。外面はヘラ磨き調整を施しているが、内面は指圧痕をそのまま残している。

（６）は甕形土器であるが、調整は不明である。口縁部は肥厚させず、丸くおさめている。

（７）は壷形土器の下半部で、外面はハケ目調整の後、丁寧なヘラ磨き調整を施し、内面はハケ目調整を施している。器表には表れていないが粗砂粒を多量に含んでいる。

（８・９）もまた壷形土器の底部であるが、その厚さが（８）では薄く（９）では厚い。製作手法の違いによるものであろう。

以上のほかに、小型の壷形土器体部の破片で、櫛描直線紋・波状紋を繰り返し、最下帯を扇形紋にするものがある。

これらの出土遺物は、第Ⅱ様式に属するものであろう。

包含層
（図38・39）

当包含層は、ＳＢ07～12の検出面上を覆っていた土層で、先の住居址に時期幅があったように、以下の出土遺物も均一には取り扱えない。

（１）は壷形土器の口縁部で、上下に肥厚させた端面に擬凹線３条を巡らす。胎土中には粗砂粒を多量に含む。

（２）は無紋の壷形土器で、口縁端部は上方へつまみ上げるように肥厚させる。

（３）は小型の壷形土器の頸部である。頸部から肩部にかけて櫛描直線紋と波状紋を巡らす。器壁外面には赤色顔料が塗布されている。

（４）は直口の壷形土器で、外面はハケ目調整を施している。胎土中には粗砂粒を多量に含む。

（５）は短い頸部から折り返すように口縁部をつけた壷形土器である。下方へ拡張した口縁部端面には擬凹線が３条巡らされている。頸部以下は一応ヘラ削りのようであるが、凹凸を残したままである。

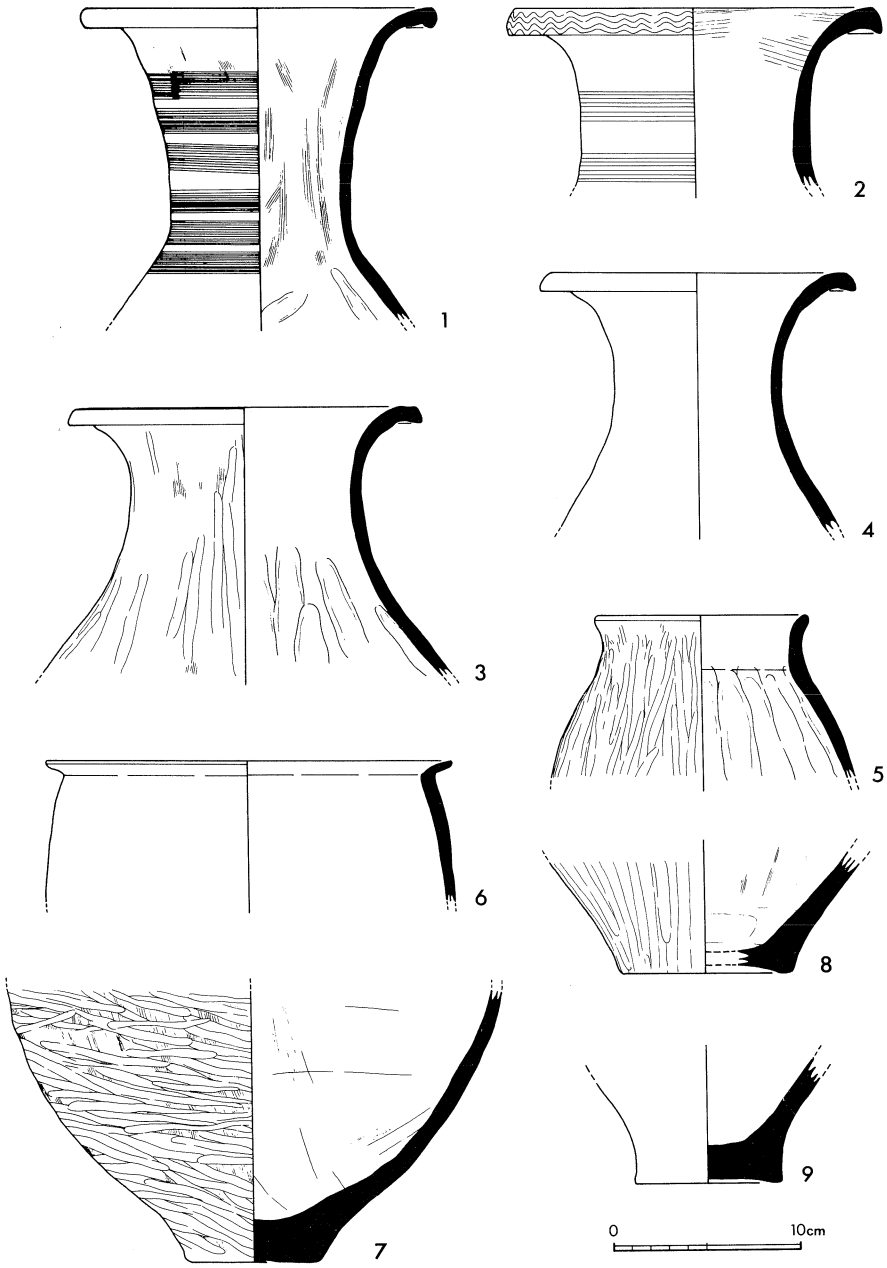


図37　ＳＢ１２　出土土器（１～９）

（６）は、甕形土器の逆円錐台部の上端をナデて口縁部とする粗雑な調整の鉢形土器である。外面は叩き目をそのまま残し、内面は板状工具によるナデ、ないしはナデ調整である。

（７）は小型の鉢形土器で、内面および外面上半はナデ・ヨコナデ・板状工具によるナデ調整を施すが、外面下半は叩き目調整痕を残す。底部は

ドーナツ状のあげ底である。

（8）は小型の鉢形土器で、外面はナデ調整、内面はナデおよび板状工具によるナデ調整を施しているが、粗雑なつくりである。

（9）もまた小型の鉢形土器で、外面は指圧痕を残し、内面はナデ調整を施している。

（10）は小型の台付鉢形土器で、外面はナデ、内面は板状工具によるナデ調整が施されている。胎土中に赤クサリ礫を多量に含む。

（11）は頸部の締まる大型の鉢形土器で、外面はハケ目調整を施しているが、内面は不明である。1㎜前後の砂粒を多く含むが、器表はよく調整されている。

（12）は（11）と同形の鉢形土器である。外面の調整は不明であるが、板状工具によるナデ、ハケ目調整を施している。胎土中の砂粒も（11）と同様である。

（11・12）は鉢形土器としたが、天井部の存在を考えると手焙形土器である可能性が高い。

（13）は体部の丸い甕形土器で、外面には粗雑ではあるが連続ラセン叩き調整を施す。内面は板状工具によるナデ調整である。口縁部端面は肥厚させず丸くおさめる。胎土中には赤クサリ礫を多く含む。

（14）は小型の甕形土器で、外面にはやや細めの叩き目調整を施し、頸部以上にも口縁部叩き出し手法のそれを残す。頸部内面には、粘土紐の痕跡を明瞭に残す。胎土中には、赤クサリ礫を含む。

（15）は厚手の甕形土器で、口縁部は段をつけるように大きく上方へ肥厚させる。外面は叩き目調整ののちハケ目調整を、内面はハケ目調整を施す。胎土中に赤クサリ礫を含む。

（16）は頸部が締まらず、体部も張らない甕形土器で、外面はハケ目、内面はナデ調整を施す。胎土中には粗砂粒を多く含む。弥生時代中期初頭の甕形土器に類似するが、口縁端部に明瞭な面をもつ。

（17）は小型の甕形土器で、内外面とも丁寧なハケ目調整を施す。口縁部は、上方につまみあげるように肥厚させる。時期の下る可能性がある。

（18）は甕形土器の上半部のみであるが、接合不能の下半部片も存在する。外面は細かく丁寧なハケ目調整を施す。内面はナデ調整であるが、底部付近は指圧痕を残す。口縁部は内側に肥厚させ、その上面は平坦である。

（19）の甕形土器は、外面肩部付近は横方向の細かいハケ目調整を施し内面は頸部の稜より1㎝ほど下方までヘラ削り調整を施している。口縁部は肥厚させず、面をつくるのみである。

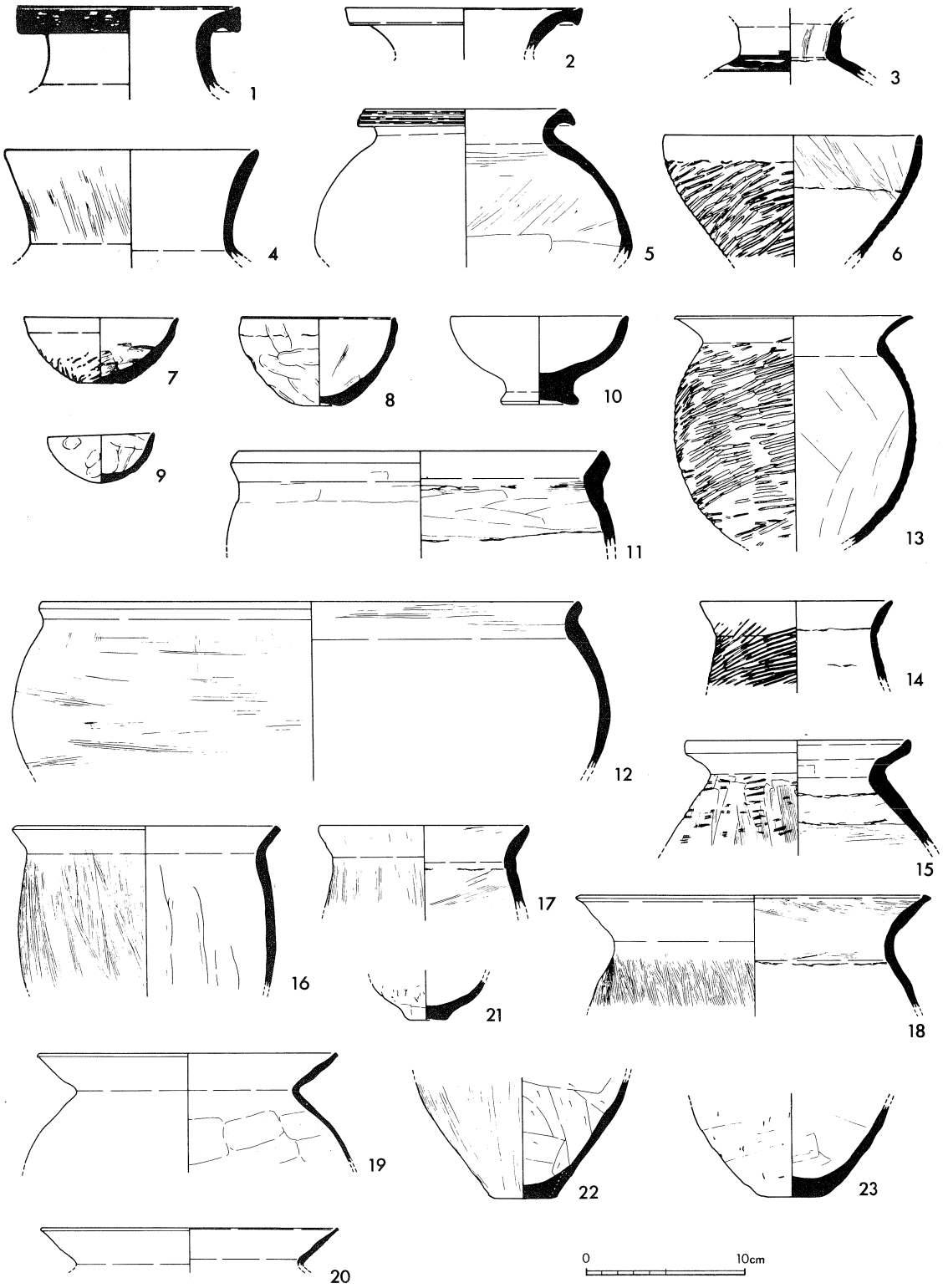


図38　包含層出土土器（1～23）

（20）は（19）と同形態の甕形土器である。

（21）は小型土器の底部であるが、器種は不明である。小さな突出する底部はドーナツ状のあげ底で、体部は叩き目調整をナデ消している。

（22）は平底の甕形土器底部で、外面はハケ目、内面は力強いヘラ削り調整を施している。

（23）は丸い体部に平底をつける甕形土器で、外面は叩き目調整ののち板状工具によるナデ調整を施している。内面も板状工具によるナデ調整がみられる。

（24）は底部に焼成前に穿孔をする甕形土器である。底部は小さな平底で、体部外面は叩き目調整ののち、部分的にナデ調整を、内面はナデ調整を施している。胎土中には赤クサリ礫を含む。

（25）は丸い体部の甕形土器もしくは鉢形土器の底部に、焼成前に穿孔をしたものである。外面の叩き目調整は、水平方向に丁寧に施している。内面はハケ目調整である。胎土中に赤クサリ礫を含む。

（26）は高坏形土器の脚部で、屈曲させた裾部は大きく開く。その屈曲部の四方向に円形の透かし孔をあける。外面は丁寧はヘラ磨き調整を施す。図では円柱部を中実としているが、屈曲部内面から粘土を押し込んだ痕跡が認められるため、見掛けの中実であるかもしれない。胎土中には赤クサリ礫を含んでいる。

（27）は高坏ないしは器台形土器の脚部で、短いが裾部は大きく開く。ハケ目調整を施しているが、粗雑な仕上げで、器表に凹凸を残す。透かし孔はない。

（28）は小型の器台形土器の脚部で、中程の四方向に円形の透かし孔をあける。

（29）は高坏形土器の脚部で、外面には丁寧なヘラ磨き調整が施されている。上端には細い沈線が１条巡る。

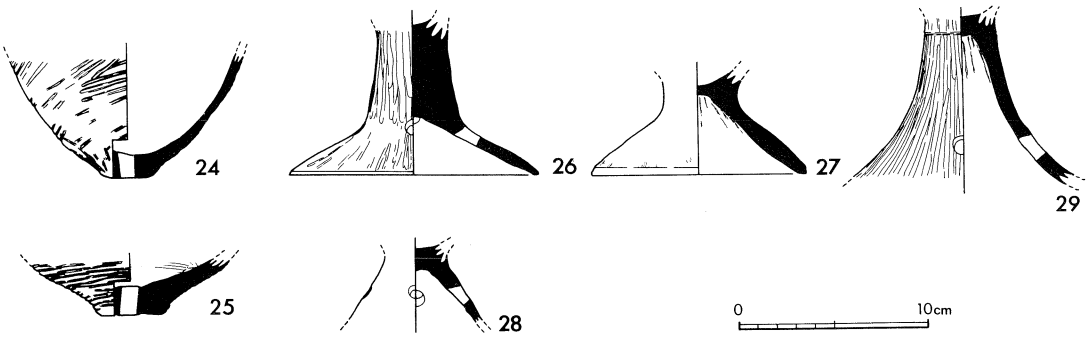


図39　包含層出土土器（24～29）

石　器
（図40）

石鏃・石錐・刃器・太型蛤刃石斧・砥石が計８点出土している。砥石を除く石器を使用していたであろう時期の遺構は、ＳＢ09・12の２棟の住居址のみである。

ＳＢ09から出土しているのは（５）の刃器と（７）の石斧である。石斧は刃部を欠損し、いずれの面も敲打痕が認められる。

ＳＢ12から出土しているのは（６）の刃器のみである。

他の石器は時期的に上がる遺構からの出土で、周辺からの流入によるものであろう。

（８）の砥石は、ＳＢ11からの出土で、粘板岩製の仕上げ砥であるが欠損している。

管　玉
（図40－10）

ＳＢ05から出土した滑石製の管玉１点のみである。濃灰緑色で長さ27.3㎜、最大径6.2㎜、最小径5.5㎜である。

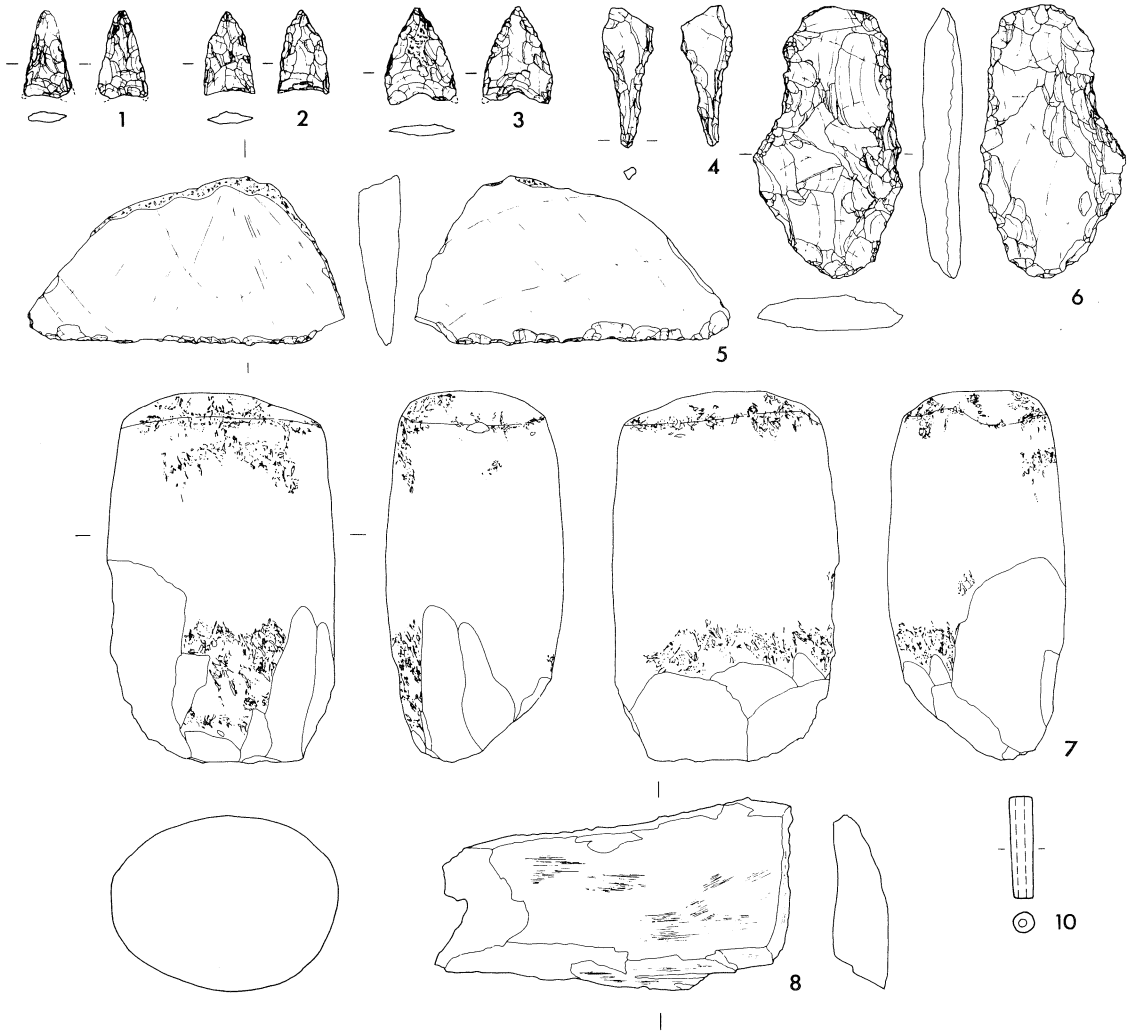


図40　石器及び玉類（１～６・10はＳ＝½、７・８はＳ＝¼）

第5章　ま　と　め

今回の調査地では、第4章にその概要を記したように、室町時代、平安時代（9世紀末～10世紀初頭、10世紀後半、11世紀中葉）、古墳時代（6世紀後半、庄内式～布留式併行期）、弥生時代（第Ⅱ、Ⅲ様式、庄内式併行期）の遺構・遺物が出土した。

遺構では、11世紀中葉の掘立柱建物（ＳＢ01-1）の補修跡及びその柱穴から出土した各種の遺物が注意されよう。また、9世紀末～10世紀初頭に属する掘立柱建物（ＳＢ03・04）に付随する地鎮遺構（ＳＸ01・04）も注意される。これらについて若干の考察を加え、まとめにかえたい。

ＳＢ01-1の補修　まずＳＢ01-1の柱根の補修跡であるが、桁行5列の内の主に2列の柱根を抜き取り、礫及び土器片を礎盤とするべく埋めこんだものである。[1] 柱で最も腐りやすいのは、地中から地上に出た部分で、その部分を切り離し、礎石建物様にしたものであろう。これに類するものは、神戸市内では今日まで居住遺跡[2]、下宅原遺跡（大前地区）[3]、上小名田遺跡[4]などで確認されている。

建築後何年程度でこの補修が行われたかであるが、一般的に掘立柱建物の柱の耐久年数は、20～30年程度と考えられている。[5] 図25－3の東播系須恵器椀は、補修を受けていない柱穴内から出土したもので、補修時に入れられた図25－1・2と型式差は認められない。この時期の土器1型式は20～30年間と考えられている。ＳＢ01-1の柱の補修は20～30年以内に行われたのであろう。

ＳＢ01-1出土遺物　須恵器　これらの補修された柱穴から出土した土器は互いに接合することから、同時にその補修は行われたと考えられる。そして、この補修の時期であるが、当地域で最も多用される東播系須恵器からみると、11世紀中葉に位置付けられる。図25－1・2は、神出古窯址群万堡池1号窯で出土したものに酷似し、包含層出土ではあるが、図25－10の鉢と同窯址では伴出している。[6] 今日までに知られる神出古窯址群中最古の時期である。

また、口縁端部をつまみあげるように肥厚させる甕や先の鉢は、平安京出土遺物にもみられ、それらは11世紀中葉にに位置付けられており、[7] 時期は合致する。

図25－9の鉢は、これまでに知られている東播系須恵器には見られない形態で、産地は不明である。

灰釉陶器　図25－5の灰釉陶器椀（山茶椀）は、美濃・多治見の製品で、近年の編

年では、大原10号窯式（猿投・百代寺窯式の新相）に位置付けられるという。[8] この窯式の実年代は、11世紀の第３四半期と想定されている。猿投窯の編年に対する実年代については、未だ決着をみていないが、[9] 百代寺窯式の年代については、森田稔氏が1050年より後、[10] 前川要氏が1050年より前[11]というように、11世紀中葉を中心とする時期が設定され、細部に問題は残ろうが今回出土遺物と齟齬を来さない。

なお、神戸市北区の上小名田遺跡では、図25－１・２の東播系須恵器椀と丸石２号窯式（猿投・百代寺窯式古相）併行の灰釉陶器椀（山茶椀）が伴出している。

黒色土器

図25－４の黒色土器であるが、橋本久和氏のＢ類椀Ⅱｂタイプで、Ⅲｂ期にあたると考えられる。[12] このⅢｂ期には、1050年を中心とする年代が与えられており、先の東播系須恵器・灰釉陶器椀（山茶椀）にみた時期と合致する。

今回ふれることのできなかった図25－８の口縁部を折り返した白磁碗や同11の羽釜も含め、これらの遺物は、平安時代後半の各地域間における土器の併行関係や実年代を考えていく上で、貴重な資料である。

地鎮遺構

第３遺構面では９世紀末から10世紀初頭のものとみられる２ヶ所の地鎮遺構（ＳＸ01・04）が検出された。

遺構からみて、このころの掘立柱建物にともなう地鎮めには、建物に付随するかたちで穿たれた土坑においてとり行われるものと、建物の柱穴においてとり行われたものの２種がみられる。それぞれの違いについては鎮めるべき対象の違いによるものと考えられ、大地にうがたれた穴は土地そのものを鎮めるためのまつりに使われ、柱穴への埋納は立柱にあたってのまつりであると考えられる。今回発見の地鎮遺構はいずれも前者に属するものである。

類　例

平安時代頃の既知の地鎮遺構を概観していくと、兵庫県立岡遺跡[13]では、掘立柱建物群に伴う径52cm、深さ11cmの土坑のなかに土師器の皿10枚が並べるようにして置かれ、土坑中央部に位置する皿の上から銭貨１枚が出土している。滋賀県服部遺跡[14]では掘立柱建物に伴って土師器皿の集積が検出されており、皿は７枚で一組になっているという。皿と皿の間からは銅銭が２枚出土している。京都府鳥羽離宮田中殿跡[15]では、南方建物基壇北辺の中央で土師器の壷を中心に18枚の土師器皿が散布し、壷内にはガラス小玉25個以上が納められていた。平安宮内裏承明門跡[16]では、門北方の内郭前庭に４基の地鎮遺構と考えられる土坑を検出している。そのうち、11世紀代

の２つについてみれば、１つは土師器坏２枚・皿１枚を重ねた上に、ガラス玉12個を入れた須恵器壷を置く。その傍らに倒立した土師器皿があるが、調査者によると、もと壷の蓋にしていたものがずり落ちたものであろうとしている。もう１つは、櫪が輪宝に刺さった状態で土坑の中心に置かれ、輪宝の上側には金粉・銀切板・ガラス玉・ガラス片・琥珀片・綿が一夥となって出土し、その下側には糊状の液体の痕跡を確認している。これは『阿婆縛抄　安鎮法日記集』[17]にみえる延久３（1071）年の承明門北方の鎮祭であると推定されている。滋賀県上寺遺跡[18]では、掘立柱建物群に伴って２基の地鎮遺構が検出され、口縁内に15枚の古銭を入れた須恵器壷を20枚の土師器皿で覆うように出土しているものと、須恵器壷と土師器皿11～12枚が出土しているものがある。

神戸市内においても近年地鎮めに伴うと考えられる遺構が何例か検出されている。日暮遺跡[19]では平安時代全般にわたっての６ヶ所の地鎮遺構が検出されている。そのうち９世紀末から10世紀初頭の掘立柱建物に伴う土坑中には、土師器の甕の中に寛平大宝２枚以上を入れその上に土師器坏を納めている。なお、寛平大宝には稗・粟と思われる穀粒の付着が認められ、まつりの際に五穀を用いた可能性を示唆する好例といえよう。

一方、後者の例は近年あちこちで注意され、その数を増している。この場合、鎮物として銭あるいは皿・坏などを柱掘り形底に埋納する例がほとんどである。神戸市内でもさきの日暮遺跡では、柱掘り形内に延喜通宝を納めたものと土師器坏をほぼ底に納めたものとが検出されている。上小名田遺跡[20]では、建物の幾柱かの掘り形底から１～数枚の乾元大宝が出土している。芦屋市寺田遺跡[21]では、建物の柱穴埋土下層から和同開珎３枚が貼りついた状態で出土した。

ＳＸ01　さて、今回出土した地鎮遺構についてみてみよう。ＳＸ01はＳＢ03の東南0.6mに存在する浅い土坑で、中央よりやや北側に東西方向に１列に土師器の小壷を並べている。この配置はまつりを行うにあたって北向きが吉とする考え方に基づくものと考えられる。７つの壷の中からはなにも検出されず、またこのまつりが仏教に依って行われたか否か不明であるが、『仏説陀羅尼集経』[22]によればまつりに際して、五宝・五穀・七宝を用いることが記されており、作法の一部を仏教以外の人々も取り入れた可能性も十分あることから、七宝を意識し、あるいは七宝を入れることを意図して並べられたものではなかろうか。

ＳＸ04　ＳＸ04はＳＢ04の東南0.4mに存在する土坑で、小瓶を杯ないし皿で蓋するかたちあるいは、杯・皿に小瓶が伴うものは、さきにも挙げたように

平安時代においてはしばしばみられるもので、あちこちで検出例が報告されている。しかし今のところそれがいかなる祭式によるものかは明らかでない。

今後もこうした遺構が発見されると考えられるが、祭式を考える上にも土器や銭だけでなく、それらを覆う埋土や周囲にも祭りに関わる遺物や遺構の存在が十分予想される。例えば、さきにみた平安京承明門跡で糊状の液体の痕跡が確認されているが、東密の土公供作法では土坑に散供として粥を注ぎいれる例もありそうしたものの可能性も考えられる。記録に残された地鎮めの祭式はひとつではないが、今後はそうした視点からの調査も行われることが期待される。

吉備系壷形土器　最後に当地方では稀な器形であるＳＢ11出土の壷形土器について触れておきたい。これは、第４章のＳＢ11の項でその概略を記した土器片の中で酷似する胎土を有する底部、体部、肩部の数片をもとにして復元した壷形土器で、吉備を中心に分布することで知られている。(23)

まず胎土についてであるが、色調は茶褐色で、混和材として粒径１㎜以下の黒色の鉱物粒を含む。この色調及び含有鉱物は吉備のそれに酷似するものもあるということである。しかし、この底部の形態は、吉備のこの種の壷形土器には通有のものではなく、畿内及びその周辺部のものであろう。

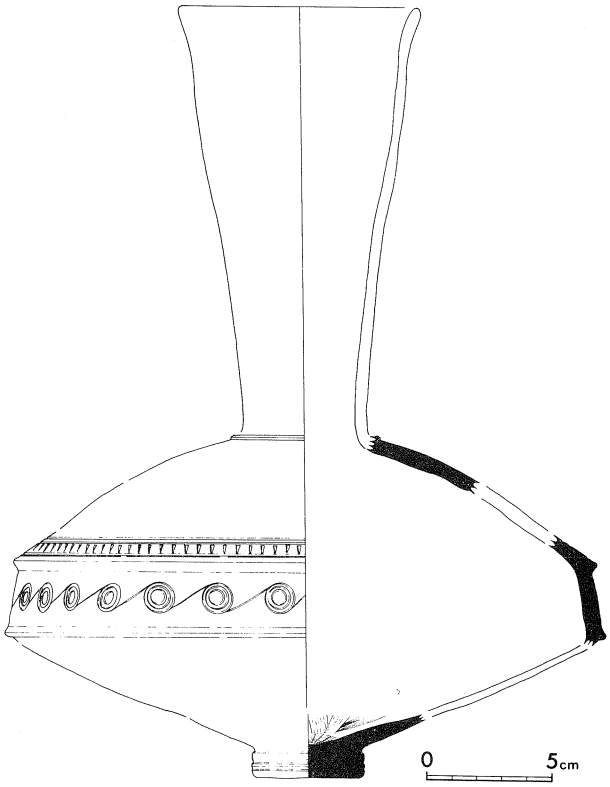


図41　ＳＢ１１　出土壷形土器復元図

次にこの壷形土器を最も特徴付ける体部であるが、突帯紋間にスタンプされた同心円紋を沈線でつなぎ、連続渦紋に擬するものは、スタンプ紋の中でＣ類とよばれ、(24)その分布は畿内・吉備を中心としている。(25)

復元に用いた底部が誤っていなければ、畿内～吉備の間で各地域の影響のもとに製作されたものであろうし、その場合、吉備のものに酷似する胎土についても、讃岐や生駒西麓、大和にも求めることができよう。ただ、現在それを確認できていない。また、この底部を復元に用いる

ことが不適当であったとすれば、素直に吉備からの搬入と考えるのが妥当であろう。

この種の壺形土器は「特殊壺」の系譜を引くものと考えられ、芋岡山遺跡[26]、黒宮大塚古墳[27]、立坂弥生墳墓[28]等の墓址及び関連遺構内から出土しており、芋岡山・黒宮大塚例は丹塗りが施されており、祭祀的色彩の濃い壺形土器である。また一方集落址における出土例も、時期のやや異なるものも含めると、百間川当麻遺跡[29]、百間川原尾島遺跡[30]、上東遺跡亀川調査区[31]、門前池遺跡[32]、下市瀬遺跡[33]、畿内においては田能遺跡[34]、亀井遺跡[35]などで出土している。集落址出土例も、亀井遺跡・百間川原尾島遺跡では「彩文」が、田能遺跡ではC類スタンプ紋が、下市瀬遺跡では線刻による重弧紋・羽状紋・鋸歯紋が施され、祭祀的色彩の濃い土器といえよう。

当遺跡におけるこの壺形土器は竪穴住居内からの出土である。また、神戸市西区伊川谷町の池上北遺跡からも同種の壺が出土しているが、それもまた竪穴住居内からの出土である[36]。これらの竪穴住居が、祭祀に関わるものかどうかは現段階では検討できない。

今回、この形態の壺形土器とスタンプ紋について、多くの類例に当たることができず、何ら結論めいた事柄を導き出せなかったが、今後の課題としておきたい。

註1　これまでの調査では、柱穴内の土器・礫等については建物廃棄時の処置と考えていたが、補修の際のものであることを宮本長二郎氏よりご教示いただいた。

註2　丸山　潔　『居住遺跡発掘調査概要』　神戸市教育委員会　1984

註3　丸山・黒田恭正　他　「下宅原遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1986

註4　神戸市教育委員会　『上小名田遺跡　現地説明会資料』　1987・1988

註5　浅野　清　「寺院　一、先進地域における寺院の成立と展開」『日本の考古学』Ⅶ　歴史時代（下）　1967

註6　丹治康明　「神出古窯址群万堡池1号窯」『昭和62年度埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1990

註7　宇野隆夫　「後半期の須恵器」　『史林』　67巻6号　1984

註8　斉藤孝正氏のご教示による。

若尾正成　「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶』№1　美濃古窯研究会　1987

斉藤孝正　「灰釉陶器生産の一様相」『美濃の古陶』№3　美濃古窯研究会　1989

註9　斉藤孝正　「施釉陶器年代論」『論争・学説　日本の考古学』6　歴史時代　1987

註10　森田　稔　「猿投窯灰釉陶器編年再考」『古代文化』第36巻第8号　1984

註11　前川　要　「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』　1984

註12　橋本久和　「畿内の黒色土器(1)」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』　日本中世土器研究会　1986

註13　櫃本誠一　他　『川島・立岡遺跡』　太子町教育委員会　1971

註14　木下密運・兼康保明　「地鎮めの祭り－特に東密の土公供作法について－」『柴田実先生古稀記念日本文化史論叢』1976

地鎮めの祭りについては、兼康保明氏より多くの御教示をいただいた。

註15　鳥羽離宮跡発掘調査研究所　『鳥羽離宮跡』　1972

註16　梅川光隆　「平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度　京都市文化観光局　1986

註17　『大日本仏教全書』阿婆縛抄５

註18　谷口智樹　『上寺遺跡発掘調査概要報告書』　草津市教育委員会　1986

註19　谷　正俊　『日暮遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1989

註20　註４に同じ

註21　南　博史　他　『芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書』　財団法人　古代学協会　1985

註22　『大正新脩大蔵経』密教部１

註23　この壺形土器については、復元図の作成も含めて、藤田憲司氏から多くのご教示をいただいた。

註24　名越　勉・甲斐忠彦　「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌』第57巻第４号　1972

註25　栃木英道　「スタンプ文について」『吉竹遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1987

註26　間壁忠彦・間壁葭子　「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告―弥生時代後期の墳墓群」『倉敷考古館研究集報』第３号　1968

註27　間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司　「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号　1977

註28　近藤義郎　「立坂弥生墳丘墓」『総社市史　考古資料編』　1987

註29　福田正継・島崎　東　「百間川当麻遺跡１」『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県教育委員会　1981の右岸用水地区。

註30　岡田　博　他　『百間川原尾島遺跡２』岡山県教育委員会　1984の丸田調査区。

註31　柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美　「上東遺跡」『川入・上東』岡山県埋蔵埋蔵文化財調査報告16　1977

註32　枝川　陽・新東晃一・松本和男　『門前池遺跡』岡山県埋蔵埋蔵文化財調査報告９　1975

註33　新東晃一・田仲満雄　「下市瀬遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査１』　岡山県埋蔵埋蔵文化財調査報告３　1973

註34　村川行弘　他　『田能遺跡概報』　兵庫県社会文化協会　1967

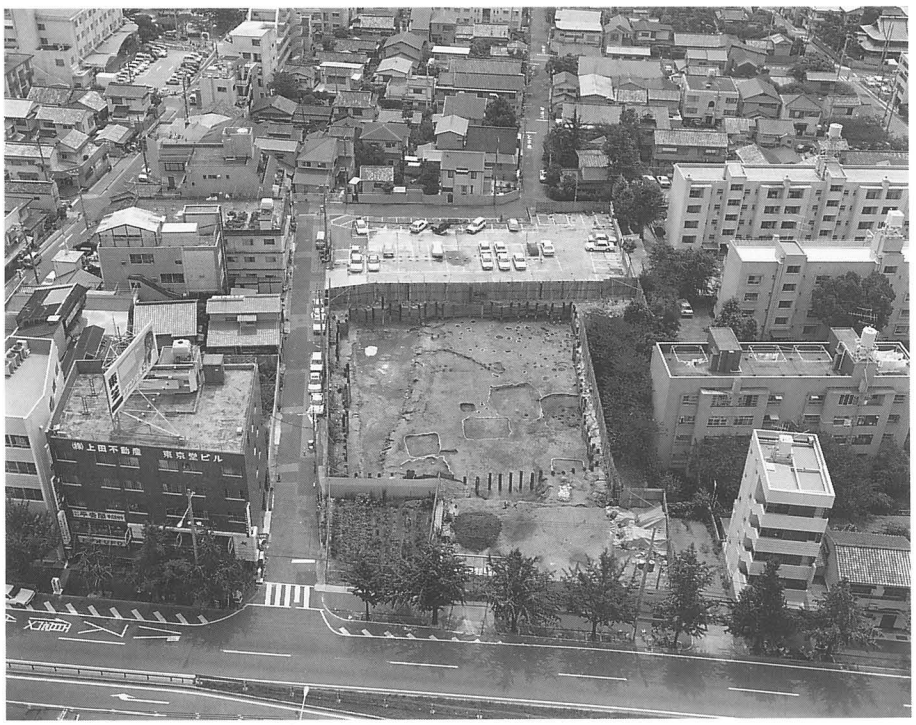
概報では、手焙形土器とされているが、図41の壺形土器と同形態の体部と考えられる。

註35　畑　暢子　他　『亀井』　大阪文化財センター　1983

註36　菅本宏明　「池上北遺跡」『昭和58年度埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1986

写　真　図　版

1．調査地付近航空写真（南から）

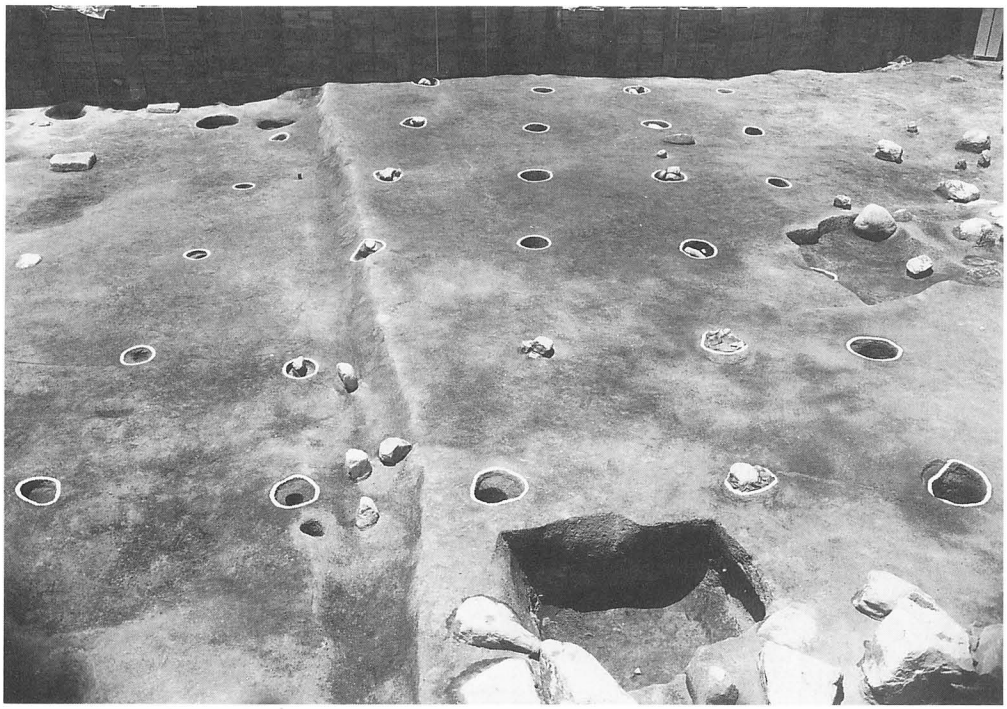


2．調査地付近航空写真（北から）

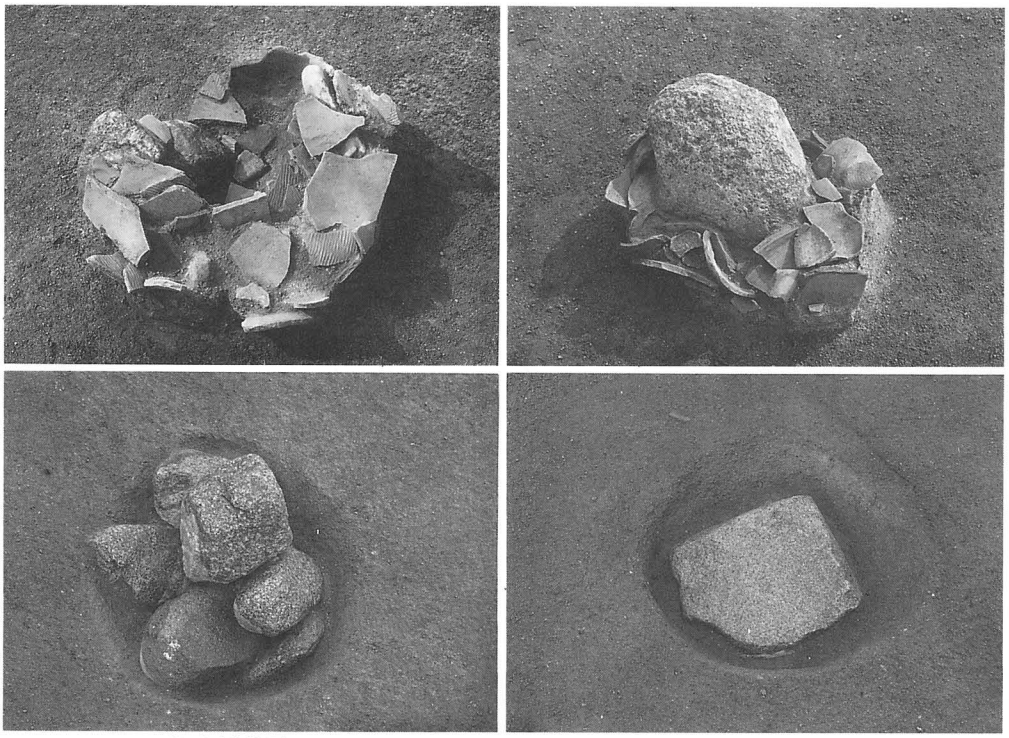
図版　2

1．花崗岩採石跡(南から)

2．花崗岩に残された矢穴

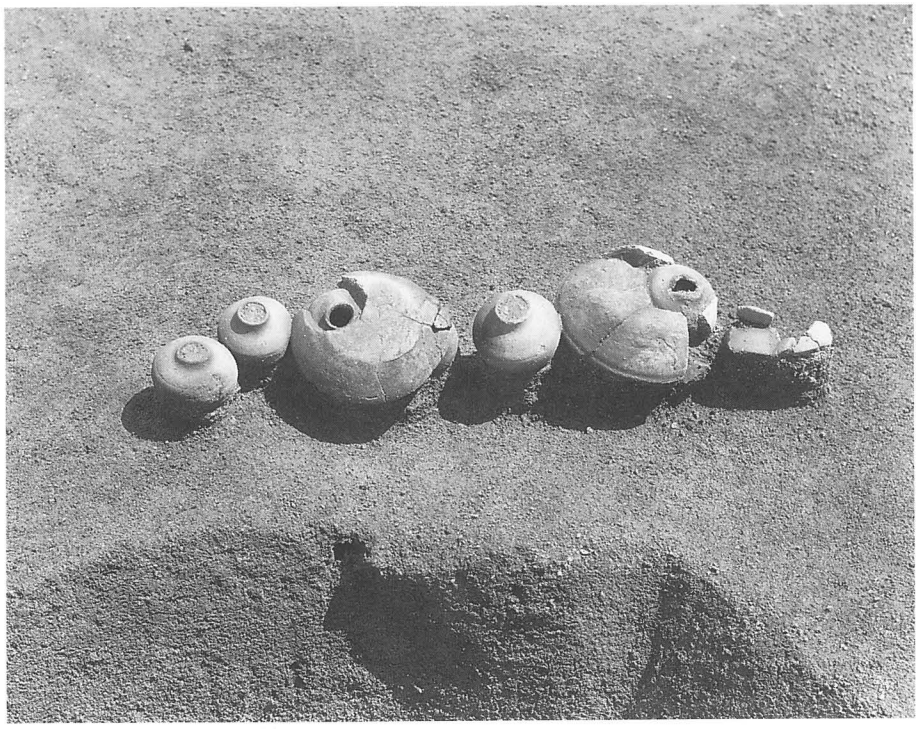


1．ＳＢ01-1(東から)



2．ＳＢ01-1 柱穴補修跡

図版　4



1．ＳＸ01 土器出土状況

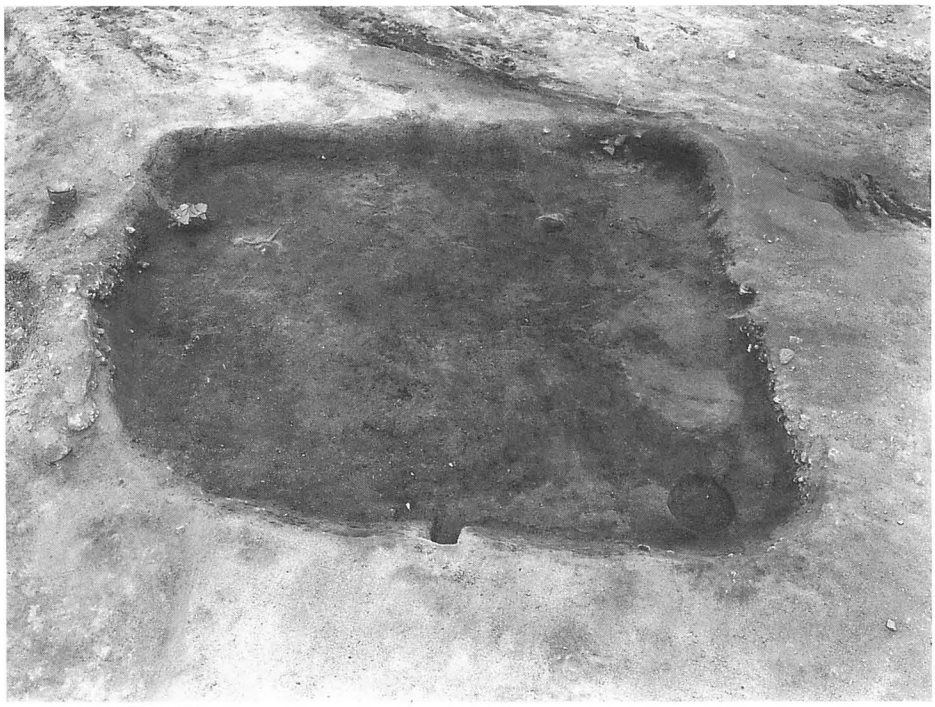
2．ＳＸ04 土器出土状況

1．ＳＢ05(東から)

2．ＳＢ06(北から)

図版　6

1．ＳＢ07(南から)

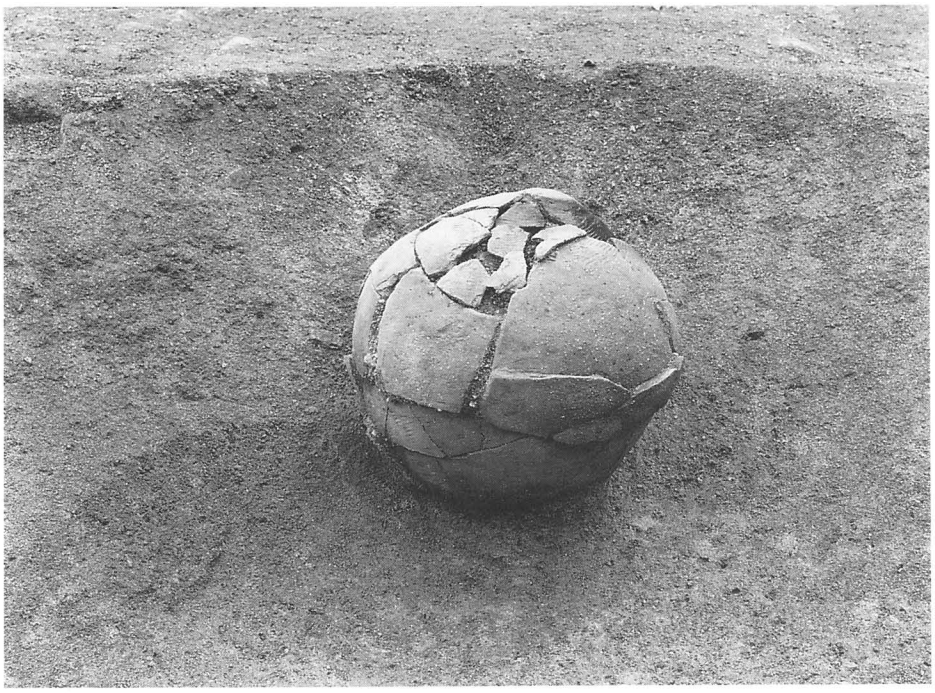


2．ＳＢ08（南から）

1．ＳＢ09(東から)

2．ＳＢ10(北から)

図版　8



1．ＳＢ10 土器出土状況

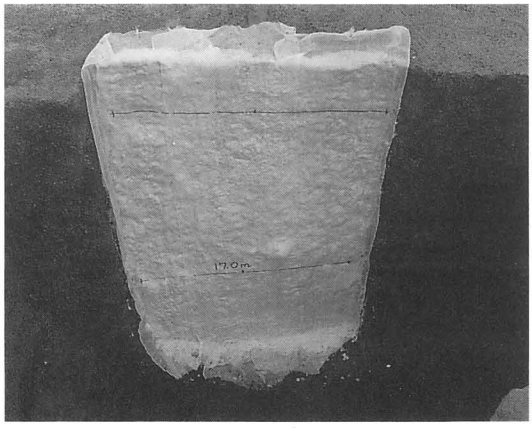
2．ＳＢ11(北から)

1．地震跡検出状況

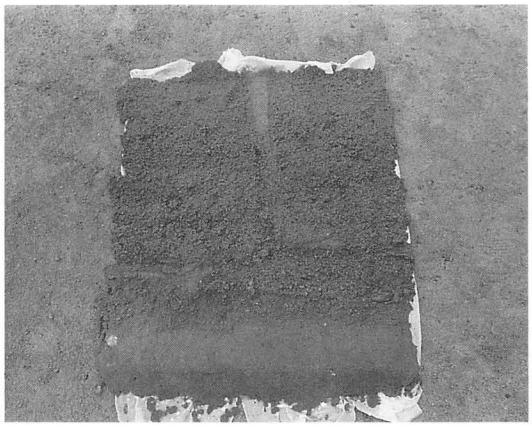
2．転写面前処理(樹脂噴霧)

3．転写用樹脂第1次塗布

4．補強材貼付



5．転写用樹脂第2次塗布



6．転写完了

図版　10

ＳＢ01-1 出土土器　１．須恵器椀　２．黒色土器椀
３．灰釉陶器椀　４．土師器小皿　５．須恵器大甕

住　吉　宮　町　遺　跡
第　11　次　調　査
1990.3.31.
発　行　神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
印　刷　大和出版印刷株式会社
神戸市中央区北本町通4丁目2－20

広報印刷物登録・平成元年度第242号（A－6類）